

アーツ前橋 令和元年度 研究紀要
Bulletin of Arts Maebashi No.2

目次

エシカル・ミュージオロジー：地域との連続性	住友文彦	1
アーツ前橋における「対話による美術鑑賞プログラム」の取り組みについて	辻 瑞生	13
表現の森 中島佑太×南橘団地 地域のうちとそとを行き来しながら深めるプログラム	今井 朋	33

エシカル・ミュージオロジー：地域との連続性

住 友 文 彦

1. はじめに

本稿は、アーツ前橋におけるキュレーションの実践を踏まえ、ミュージアムを対象にした批評理論と昨今のミュージアムをめぐる新しい議論の潮流がどのように関係しているのかを考察するものである。

博物館学（ミュージオロジー）は、博物館を対象に教育学/保存科学/経営学などを用いた研究領域であり、美術館の専門職として仕事をおこなう学芸員の資格取得において必修科目となっている。いっぽうで、一般的にミュージアム研究と呼ばれる学際的な人文研究が博物館に大きな影響を与えるようになって久しい。それらは、ミシェル・フーコーの身体を規律訓練化する権力への批判や、おもにエドワード・サイードの西洋による収奪的な「まなざし」への批判に依拠した批評理論であり、西洋の啓蒙主義や帝国主義を自己批判することで博物館において展示されるモノの収集と分類を対象に展開されてきた。その成果は、展示が生成する意味にいち早く注目したダンカン・F・キャメロンや万博や百貨店とミュージアムの誕生を歴史的に辿るトニー・ベネット、あるいは受容理論やコミュニケーション研究を取り入れたシャロン・マクドナルドなどの仕事に引き継がれている。また、ジェイムズ・クリフォードらの「ポストモダン人類学」やノーマン・ブライソンらの「ニューアートヒストリー」は、ミュージアムが何をどのように展示するかに大きな影響を与えるほどの重要性を持つに至っている。

こうした理論の展開が伝えることは、ミュージアムの機能が分類学に基づく安定的な意味の伝達から、展示の解釈をめぐる論争を抱え込むものとして認識されるようになったという点

である。しかし、実際には現代においても美術館が地域やジャンルの分類、あるいは巨匠や名作を中心に据えた展示をおこない、来場者が従順にその価値を確認するといった鑑賞行動は多く見られる。それは前述した批評理論の積み重ねとは無縁なまま、権威的な価値の再生産を繰り返している。その一因として、静的にモノを扱う伝統的な博物館学が知識の一方的な伝達や保護や管理を重視し、国家や近代合理主義による規律訓練化やモノが伝え生成している意味に対して十分な関心を払っていない点が挙げられる。いっぽうでミュージアム研究が発展させた「展示の政治学」は、複合的なミュージアムの活動の一部を切り出し、例えば運営や地域社会との関係性といったステークホルダーとの交渉を捉え損なっている点が問題ではないかと考えられる。

2. ミュージアムの新しいモデル

その手掛かりとして、まずポストモダン批評の重要な論客ユージェニオ・ドナートが書き記したミュージアム論とも言える「博物館の炉『プヴァールとペキュシェ』をコンテクスチュアルに読む」⁽¹⁾に着目してみたい。ギュスターヴ・フロベールが書いた『プヴァールとペキュシェ』（1881年）は、百科全書的な知の網羅を目指す筆耕の二人が挫折する様を物語った小説である。手当たり次第になんでも書き写すプヴァールとペキュシェの行動は、秩序を持った合理的な表現/表象を世界に与えることができる信念に支えられている。それに向けられたフロベールの読みについてドナートはこう書いている。「図書館の存在論-神学的な主張に対して言語の面で加えられる批判は、図書館がな

んとか一個の中心と一個の境界を与えようと腐心している言語の網の、その境界が実はオープン・エンディッド（開かれている）であることを強調する。」⁽²⁾したがって、開かれた外部との関係において図書館もまた連続体のひとつでしかない。さらに博物館は、断片の空間的並置（虚構）によって、それ自体異質で雑多な連続体を含む、一連の連続体のひとつであるとも述べている。さらに、「博物館が事物の性質と本質に到達し得ないのは、それが事物を事物そのものとの関連においてではなくして、見る人間との関連において理解しようと努めるが故である。」⁽³⁾として、そのアントロポセントリズム（人間中心主義）を批判する。

ここまでは、フーコーの影響を受けたミュージアム批判として順当とも言える内容だが、興味深いのは論考後半で、〈言葉〉と〈物〉の間に連続的表象を実現しようとする博物館の認識論における失敗を、二人の筆耕にとって植物学の挫折から地質学と熱力学へ誘惑される経験として描き出すところではないだろうか。断片が歴史の言説へ移行する点を問題視するドナートにとっては地質学も認識論的に破綻を余儀なくされているものだが、人類が地球環境に与えている影響に警鐘を鳴らす「人新世」という概念が地質学から生まれているのを現代の私たちは知っている。それは、従来の人間を中心に置いた地球環境の捉え方を大きく揺るがしている。また、熱力学のメタファーは考古学や分類学の認識論的特権を排除し、事物は生成し変容するという概念によって互いに没関係的な事物の並びを考えるように促している。

1979年に発表されたこの論考に触発される形で、その翌年書かれたのがよく知られたダグラス・クリンプの「美術館の廃墟に」⁽⁴⁾である。クリンプはとりわけ写真技術を用いた複製イメージが美術作品に介入することによって、伝統や進化といった歴史概念を基盤に持つ認識論が無効になると主張した。そして、「博物館学の歴史とは、博物館（美術館）のもつ異種混淆

性を否定し、それを同質的なシステムあるいは連続へと還元しようとする、ありとあらゆる試みの歴史にほかならないのである。」⁽⁵⁾と述べている。

こうした一連の議論から得られる新しいミュージアムのモデルとは、認識論的な特権を与えられた場所を占めるのではなく、歴史的社会的な環境のなかに連続体として存在し、収集や展示する対象が異種混淆性を帯びていることで、同質的なシステムへの還元を回避するもので、であるとひとまず言えそうだ。帝国主義や科学的合理性への自己批判がこれらの批評理論の大きな柱だったことを思い返せば、ドナートとクリンプが「展示の政治学」として展開したこれらの考察にはミュージアムとは何かを倫理的に問う声が大きく響いている。この二人は自分たちの批評理論をミュージアムのモデルとして構想したわけではないにしても、それゆえに彼らの問いかけは博物館関係者にとって深刻なものとして受け止められてきたはずだ。いっぽうで「一個の中心と一個の境界」を与える安定した意味の提供をおこなうモデルは根強く、それを回避するのは未だ簡単なことはない。しかし、彼らが提示したミュージアムを様々な連続体の束として構想するモデルは、倫理的課題の大きさを考えると不可避であるように思える。

3. 連続体の束

こうした批評理論の展開や現実社会の経験から、私たちはどのように新しいミュージアムのモデルを想像することができるのだろうか。連続体という言葉は、原文ではseries、高山宏訳では「セリー」とルビを振られ、ミュージアムが収集や展示するモノが産出する意味が周辺の環境との間になだらかな有機的つながりを持つことを指すと思われる。それが、考古学ではなく熱力学にドナートが着目した理由ではないかと考えられる。さらに、そのことは作品やモノの展示や収集に限らず、私はもっと空間としての美術館や、その運営に関与する人々の間にも

拡張させることが可能なのではないかと考えている。

アーツ前橋は群馬県前橋市立の公立美術館として2013年10月28日に開館した。後発のミュージアムとして、ここまで記述してきたようなミュージアムを対象にした議論をどのように新しい美術館のプログラムに反映することができるのか、あるいはさらに新しい視点を加えることで伝統的な博物館学から別のミュージアロジーへと更新させることができるのか、について考えることは必須だった。

では、具体的に連続体の束としてのミュージアムという概念が、どのように当館のプログラムに反映されているかを例示してみたい。

ひとつめに、作品や資料を生成変化する連続体として見る系列がある。収集や展示においては、地域の美術がいかにグローバル・アート・ヒストリーとの間に断絶ではなく連続面を見出すのか。その価値の変容をとらえる展覧会として「カゼイロノハナ」展 (fig. 1、2、3)、「白川昌生」展、「加藤アキラ」展、「横堀角次郎」展等が企画された⁽⁶⁾。また収集作品は、美術史以外に、生糸産業の歴史、災害や戦争等の被災体験、社会の少数派と関わる作品が増えてくるようになり、地域の固有性を他の地域における歴史や記憶とも共有できる作品が複数の文脈をつくりつつある。さらに、身体感覚を基軸に同時代の美術作品をグループ展によって構成する企画では、着る、住む、食べる、というテーマを設定した。これらは「美術」という概念の誕生以前に、モノが作り出され、保存され、使われる、という変化を対象に、素材や技術について考えることになり、保存科学や異なる文化間の交渉を考察ための人文的な学際知によって探求されるものである。

二つめは、場所の記憶を紡ぐ連続体である。ミュージアムの建築や展示物は身体的な経験によって記憶される側面が大きい。施設を訪問する前後に、来場者は周辺地域の歴史、経済、文化も確実に場所の記憶として刻み込む。垂直方

向に切り結ぶ歴史の関係性と、水平方向の同時代的関係性が個人のなかで入り混じる。ミュージアムの重要な役割は、異なる時代や地域のモノや作品が出会う経験を提供することである。開館前からほぼ毎年実施してる白川昌生の《駅家の木馬まつり》は、地域の歴史をフィクショナルな物語に仕立て、それをもとに隣接する商店街を練り歩く。また、アーツ前橋はリノベーションによって建物の過去の記憶を引き継ぎ、周辺地域のアートのスペースとも緩やかに連携している。さらに展覧会、ラーニング事業、滞在制作事業など複数のプログラムにおいて断続的に活動が継続していく例が少なくない。滞在制作事業に参加したイルワン・アーメット&ティタ・サリナは展覧会にも二度参加し、アーティスト・イン・スクールにも参加した。母子家庭の生活支援団体と開館前から協働（「表現の森」プロジェクト）している廣瀬智央は、2020年4月に個展を開催する。

最後の三つめは、感性的なはたらきが共有や共生の感覚を産み出す連続体である。とくに鑑賞だけでなく、作品を創り出す実践と関わる経験が重要ではないだろうか。滞在制作事業はアトリエと生活の場を作家に提供し、作品制作のアイディアから調査や制作の過程に寄り添うことになる。そのなかで未知のことや失敗と関わる経験を学芸員やコーディネーター、あるいは協力者たちと共有する。非専門家としてボランティア（当館では「サポーター」と呼ぶ）が参加することもある。「サポーター」は美術館の運営補助以外にも、親子向けのプログラム（「アーツひろば」）や自主企画展などの活動をおこなっている。また、対話型鑑賞の実践も、非専門家が拡張する美術館の活動である。これらは、一過性の関係ではなく積極的に関与する人たちが参加する場を産み出している。その延長に長期のアートプロジェクトとして企画した「表現の森」プロジェクト（fig. 4、5）が存在する。このプロジェクトでは美術館に来場できない人たちを想定し、医療、福祉、教育の

現場と作家が継続的に事業をおこなっている。

「表現の森」プロジェクトの経験は、「表現の生態系」というグループ展の企画に反映された。

こうした連続体としてプログラムを考えることは、クリンプが批判した同質的なシステムへ還元する性質を持つミュージアムへの反省を促した。つまり、中心を強化する同心円的な広がりとして連続体と呼ばれるべき系列は違う。それは連続体のなかではプログラムは固定化されず、異物として別の点に影響を与え、相互的な影響関係が生じるからだ。これまで収集と展示を中心に据え、地域の人々や教育機関を対象にした事業を周縁部に配置したプログラムの比重は従来のミュージアムのモデルから変わっていくべきである。

3. ミュージアムの定義をめぐる議論

以上、ドナートとクリンプの論が発展させたミュージアムのモデルを参照しながら、アーツ前橋がおこなっているプログラムを連続体の束として見なすことができる具体的事例を挙げてみた。それは言ってみれば、俯瞰する特権的主体として浮かび上がっていたミュージアムが地域と同じ連続面に着地し、できるかぎり異種混雑性を抱え込むことで、モノや人が機構の内側と外側を行き来するような特徴を持つ。この章では、そうしたモデルの変化について国際的な専門家たちが昨今展開している議論に目を向ける。

国際博物館会議 (International Council of Museums、略称: ICOM) は、2019年の京都大会で博物館の定義を改訂することを試みた。その作業を担ったMDPP (博物館の定義、見通しと可能性) 常設委員会の提言及び報告⁽⁷⁾ (以後本論においては「提言」と呼ぶ) を見てみたい。

まず現在のICOM憲章における定義にはこう書かれている。「博物館とは、社会とその発展に貢献するため、有形、無形の人類の遺産とその環境を、教育、研究、楽しみを目的として収

集、保存、調査研究、普及、展示する公衆に開かれた非営利の常設機関である。」

提言は、このなかの「社会とその発展に貢献する」という文言についてこう記す。「『博物館』と『社会』という2つの言葉の間に、均一性や融和性、安定性といったものを表現できます。しかし、社会は今、かつてない程に変化しつつあり、博物館は矛盾と争いの伴う環境の中に現実には存在しています。」⁽⁸⁾ そして、「ICOMはこれまで数十年間にわたり、博物館のコレクション、歴史上の記念物、文化背景等への保護・擁護の立場を取ってきましたが、今後は加えて、人権、社会正義、ならびに危機が高まりつつある生命の源としての自然環境などへの、価値基盤の擁護や活動家としての立場という要素も必要ではないかと考えます。」⁽⁹⁾ として、問題点を明確化した。

また、次のような二つの文言にも明らかな変化を見出すことができるだろう。「毎年、種の絶滅や耕地土壌の永久的な消滅、階級差による平均余命の格差、紛争と戦争によって移動を余儀なくさせられる何百万人もの人々等が明らかに増大していることを背景に、博物館が差し迫った社会問題との関連で中立性を主張することが、社会的責任の自制として、博物館の専門性、広い社会によって益々認知されつつあります。したがって、問題となるのはむしろ、博物館が反映もしくは表意するかどうかではなく、どの価値をどの程度反映するかであり、どのような世界観であるのか、また、そうしたことの認識についてどの程度透明性があるかという点です。」⁽¹⁰⁾ 「近年の北南米、太平洋、そして現在はアフリカ大陸といった、固有の先住民族の存在によって推進される新しい博物館は、学際的で全体論的なアプローチと手法を開発し、世界観、宇宙論、認識論を受容することで、森羅万象の根源的な結合性と相互関係のなかで、オブジェクトとコレクションを理解・解釈しています。こうしたパラダイムは、博物館が21世紀の複雑性に直面しつつも、単一の学問分野の手

法やアプローチへの固執を再検証する際には、強力な代替案となり得ます。」⁽¹¹⁾

そして、こうした議論の報告をおこなったあと、長期的な検討に向けた作業工程を記す際に、この変化はたんなる理念でなく、既に起きている出来事を反映していると主張しているのも見逃してはならないだろう⁽¹²⁾。

パブリック・ミュージアムの誕生は民主化をもとめる市民運動が促した。その革命の時代が人間を世界の中心に位置づける闘争だったことは否定しがたい。ミュージアムは領土や「まなざし」の拡大と、自律的な決定権の獲得を目指すための闘争を支える機構だった。そこでミュージアムに求められたのは、異種混雑性よりも分類に根差した科学であり、不死の身体を獲得することだった。ミュージアムを「一個の中心と一個の境界」を持つ閉鎖系にしているのは、現実の世界を俯瞰する垂直性を支える強い主体である。そうして安定した意味を伝え、地域から浮遊していた時代には、「矛盾と争い」と交わる必要がなかったが、「オープン・エンディッド（開かれている）」な境界の地平に着地した途端に、交渉と衝突を抱え込むことになる。過去の革命がもたらした大量の死や悲劇を知っている私たちは、20世紀後半以降、この地上において自己のアイデンティティと関わる権利要求をしながら社会を変革していく手段を選択してきた。ミュージアムもそうした身近な範囲で変革を求めていくために政治、教育、地域等と有機的なつながりを持つようになった。昨今の変化を捉えようとするICOMの定義改訂の試みは、こうした歴史を踏まえた倫理的転回とも呼べるものである。

4. ミュゼオロジーにおける倫理的転回

「アートニューズペーパー」誌が選ぶ2019年に起きた重要な出来事に、この倫理的転回と関係するものが二つある⁽¹³⁾。ひとつは、メトロポリタン美術館、グッゲンハイム美術館、テイト・モダン、ヴィクトリア&アルバート美術館

等、多くの名だたる美術館に多額の寄附をしてきたサックラー家が、高い中毒性によって多くの死者を出した鎮痛剤「オピオイド」によって莫大な収益を得ていることが問題視された件である。これが看過できないのは、武器の売買や化石燃料エネルギーによって利益を得ている高額所得者が他にも多額の寄附をミュージアムに対しておこなっているからである。「オピオイド」問題は医療的な緊急性と実際に中毒になった写真家ナン・ゴールディンの抗議によって明るみになったが、有力な寄附者が関与している戦争加担や環境破壊についても今後ミュージアムの運営を担う理事たちは同様の厳しい眼を向けるのだろうか。もう一つは、植民地時代にアフリカ諸国から収奪されたフランス国内の美術品の返還を促す「サル・サヴォイ報告書」が引き起こした議論だ。ケ・ブランリ美術館には数千点に及ぶ美術品がアフリカ大陸から持ち出されているとされる。ただし、美術品の来歴を明らかにする作業や返還先の特定、また現在の所蔵館が拒否した場合の解決方法など、具体的な進展には課題も多い。いっぽうで、マクロン大統領はこの報告書を支持する姿勢を打ち出しており、今後はフランス国内だけでなくヨーロッパの他の美術館にも返還要求の圧力が高まる影響があると言われている。これは、当然ながら植民地支配の歴史を持つ日本にも影響があるはずだが、目立った議論は管見の限りでは見当たらない。

民間資金の流入と収奪品の返還は、ミュージアムが社会に連続体として位置づけられる過程で起きた出来事のようにもみえる。しかし、特権的な位置づけが否定されているとはいえ、実際に取られている手段は競争原理の導入と国家間の交渉である。その結果、ミュージアムにアクセスできる人たちの階級格差は広がり、社会や自然とのつながりは分断されている。帝国主義の略奪品はもちろん、英米の大規模美術館が多額の民間寄附に依存した経営をおこなっているのは、新しいミュージアムのモデルが抱き込

んだ「矛盾と争い」ではなく、旧モデルの拡大志向が、専門家のなかではだいぶ前から知られていたにも関わらず包み隠せる限界になって明るみになったとみるべきだ。ICOMの提言は、こうした限界によって差し迫られた定義更新の必要性を説いていた。

したがって旧モデルを延命させかねない対応策とは異なる手段を考えることは重要である。そのために、最後にアーツ前橋が開館する直前に経験したリーマン・ショックと東日本大震災が与えた影響について考えてみたい。現在のミュージアム、とりわけ美術館の経営においては、リーマン・ショックによる世界不況にも関わらず高騰する美術品市場に見られるように資本家たちの影響力が増している。また、東日本大震災で私たちの多くが学んだのは、人間の知が及ばないほど大きな自然の力であり、同時に自然に依存している私たちの生命である。この二つは、自律的なモデルとしてのミュージアムを解体させ、さらに別のモデルへと導くようなインパクトを持っていた。

リーマン・ショックは暴利を貪るグローバル企業の影響力と倫理的課題を広く知らしめ、サックラー家の寄附を打ち切る判断をミュージアムの理事会に対して強いた例のように運営の透明性を求める機運を高めた。資本主義の強大さと向き合うために、ロザリンド・クラウドが「後期資本主義における美術館の文化論理」⁽¹⁴⁾で指摘した歴史主義や文化資本への批判を引き受けつつ、クレア・ビショップは「ラディカル・ミュージアロジー」⁽¹⁵⁾において〈現代性〉という時間の問題に眼を向けている。資本主義は技術革新の力を得て世界的同時性による拡張の歩みを止めない。利益の拡大や経済効果の最大化は、いまや文化の領域にまで侵食しているとビショップは指摘する。それに対抗するため、アイントフォーヘンのファン・アベ美術館、マドリッドのソフィア王妃芸術センター国立美術館、リュブリアナの国立メテルコヴァ現代美術館の三つに着目しながら、それぞれが地

域の歴史や記憶を引き継ぎながら、その見方をさらに複数化させる展示や収集の実践を高く評価する。

異文化間の移動や交流を推進するミュージアムの理念は、グローバル資本が利益を拡大するための活動と一見重なり合う。とくに現代では歴史的な価値であっても広く認知されたとたんに情報技術と資本の力によって商品化され、アクセスできる人とできない人の分断を産み出す。だから、それぞれの地域における時間の固有性と丁寧に向き合うことや、忘れ去られたモノに新しい解釈の目を向けることで、歴史を常書き替えていく作業を止めてはいけない。

それから、アーツ前橋には東日本大震災の記憶を留める作品が常設されている。普段は見えない非常階段がある空間で静かに過ごすための《静のアリア》（作者：照屋勇賢、fig.6）である。来場者は非常時における美術や美術館の役割を考える小冊子を読むか、毎日午後2時と4時に群馬交響楽団が震災直後におこなったチャリティコンサートで演奏されたバッハの「G線上のアリア」と当時の状況と伝えるスピーチを聴くことができる。未曾有の自然災害は多くの人間に対して、自然の恵みに依存してきた事実を等閑視し、自分たちの都合で作り変えてきた営為を反省的に振り返る機会を与えたはずだ。この経験は被災地だけの問題ではもちろんない。まず地球環境の破壊は喫緊の課題であり、いっぽうで人工知能の発達が人間の知性に可能性と限界を突きつけている現在、〈人間〉を別のスケールでとらえ直そうとする試みが重要視され、それはミュージアムにも押し寄せている。人間はこの惑星の他の存在とどのような関係にあるのか。これまで数々の分類が生み出してきた差別や抑圧の構造が及ぶ範囲を、他の生物や有機物だけでなく、機械やモノにまで広げて考えることは、人間を万物の尺度を測る者から追いや、脱中心化させるだろう。とりわけ、ミュージアムは多種多様な物質と技術を直接扱い続けてきている。進行しつつある脱-人間中心

主義は、ミュージアムにおける生物やモノとの関わり合いから多くの知見を得ることができるし、同時にミュージアムのあり方を確実に変えていこう。その姿を明確に描くことはまだ出来ないが、これまで確認してきた批評理論の展開と現場の経験から言えるのは、これまで一なるものと思われきた対象を複数化させていくことの繰り返しなのかもしれない。ICOMの提言が「関与、相互関係と互惠、交流、対等のパートナーシップ、アウトリーチとインリーチ、協調、連携、共有責任、共通目的および連帯権限といった概念言語による関係性の枠組み」⁽¹⁶⁾と呼ぶものは、ミュージアムの展示収集から空間のあり方や経営にまで幅広い場面で意味を持つようになるだろう。現在は、かつてのリベリズムが警戒した国家による統合の過剰さではなく、分断の進化が問題とされる時代である。そこには確固たる強い主体ではなく、相互的で対等な関係性によって多種多様な相手に関与する弱い主体がある。そうした多元主義が生み出す複数性によって他者への配慮がミュージアムに求められている。ミュージアムは、その基本的な使命として、異なる時代や地域のモノや作品が会う経験を提供するためにも、この複数性によって連続体の束のなかに織り込まれていく必要がある。冒頭で述べた通り、近年の批評理論及び文化研究は政治的な正しさを追求するあまり、ミュージアムが展示以外の幅広いプログラムや経営面における周辺環境との有機的つながりを持つ点が考慮されていない。ICOMの提言で示されている通り、ミュージアムは自律から相互的な関係性の枠組みへを持つものへ変化しつつあり、各地域の文化や歴史との連続性を強めてきた。「倫理があるのは複数の真理においてだけである」と述べるアラン・バディウの主張を念頭に、新しいモデルへの飛躍を具体的に想像してみるためにエシカル・ミュージアロジーと呼んでみることを提案する⁽¹⁷⁾。

- (1) Eugenio Donato, "The Museum's Furnace: Notes toward a contextual reading of Bouvard and Pécuchet" in J.V. Harari (ed.), *Textual Strategies*, 1979, Cornell University Press.
ここでは、『現代思想』13巻2号（1985年2月号）に掲載された高山宏訳を引用している。
- (2) ユージェニオ・ドナート「博物館の炉 『ブヴァールとペキュシェ』をコンテクスチュアルに読む」『現代思想』13巻2号（1985年2月号）、237頁
- (3) 同書、238頁
- (4) Douglas Crimp, "On the Museum's Ruin," *October*, Vol. 13 (Summer, 1980), The MIT Press. ここでは、『反美学：ポストモダンの諸相』勁草書房、1987年の吉岡洋訳を引用している。
- (5) ダグラス・クリンプ「美術館の廃墟に」『反美学：ポストモダンの諸相』勁草書房、1987年、92-93頁
- (6) これらの展覧会の展覧会の正式名称と実施年は「カゼイロノハナ 未来への対話」（2013年）、「白川昌生 ダダ、ダダ、ダ：地域に生きる想像☆の力」（2014年）、「加藤アキラ：孤高のブリコロール」（2017年）、「横堀角次郎と仲間たち：草土社の細密画から、郷土赤城山の風景まで」（2018年）である。例えば「カゼイロノハナ」では、それぞれ20世紀の美術が主に欧米の美術との影響関係によって地域固有の「洋画」の誕生、前衛芸術運動の興隆、あるいは戦争画などの歴史を辿り、地域性を超えた視点で眺められる企画をおこなった。
- (7) STANDING COMMITTEE FOR MUSEUM DEFINITION, PROSPECTS AND POTENTIALS(MDPP), International Council of Museums, published in December 2018. https://icom.museum/wp-content/uploads/2019/01/MDPP-report-and-recommendations-adopted-by-the-ICOM-EB-December-2018_EN-2.pdf, (2020年3月12日参照)
ここでは「『MDPP（博物館の定義、見通しと可能性）』常設委員会による報告と提言」日本語訳、<https://www.j-muse.or.jp/02program/pdf/MDPPteigenwayaku.pdf>, (2020年3月12日参照)に掲載されているものを一部修正して引用した。
- (8) 「『MDPP（博物館の定義、見通しと可能性）』常設委員会による報告と提言」7頁
- (9) 同書、7頁
- (10) 同書、9頁
- (11) 同書、10頁
- (12) 同書、13頁
- (13) "Top Stories of 2019", *The Art Newspaper*, Number 318, December 2019, U.Allemandi & Co., publishing Ltd., p.5
- (14) Rosalind Krauss, "The Cultural Logic of the Late Capitalist Museum", *October*, Vol. 54 (Autumn, 1990), The MIT Press
- (15) Claire Bishop, *Radical Museology or, What's "Contempo-*

rary" in Museums of Contemporary Art?, 2013, Koenig Books
Ltd.

(16) 前掲書、13頁

(17) Alan Badiou, *L'Éthique : Essai sur la conscience du mal*,
1993, éd. Hatier. アラン・バディウ『倫理〈悪〉の意識
についての試論』河出書房新社、2004年、長原豊+松
本潤一郎訳、52頁



fig.1 開館記念展「カゼイロノハナ 未来への対話」展（2013年）展示風景
手前：加藤アキラ《環》2013年 左奥：金子英彦《退屈する人》1965年、《予感》1967年
右奥：塩原友子《漠》1962年

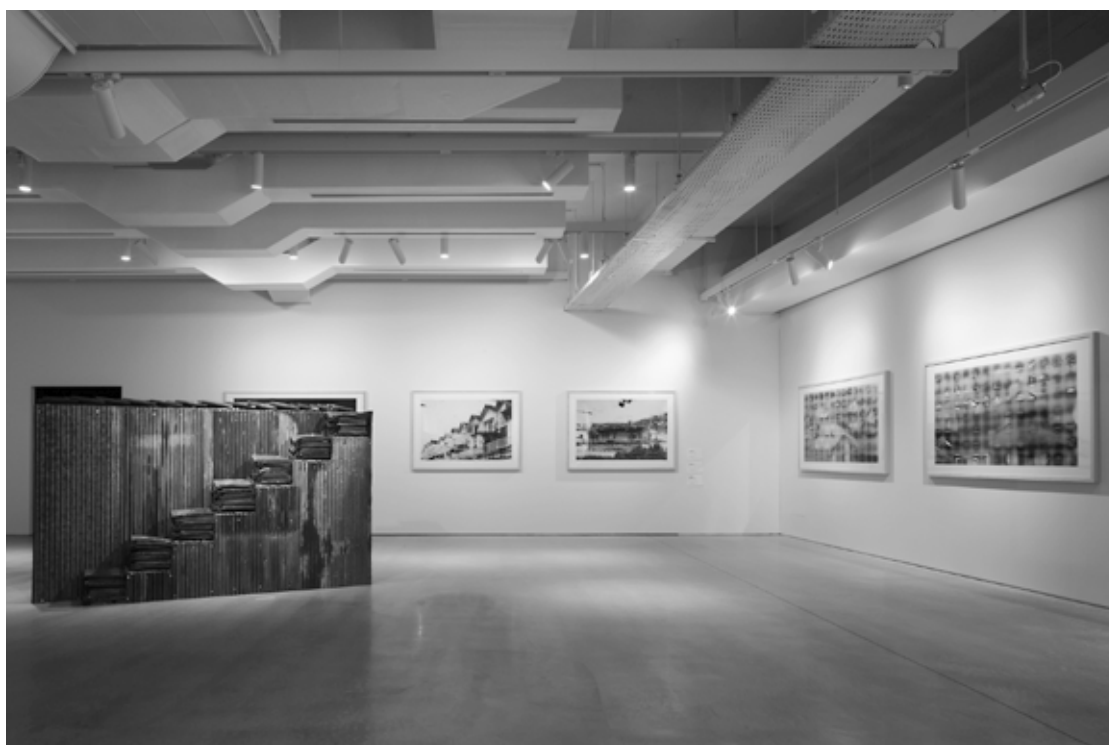


fig.2 開館記念展「カゼイロノハナ 未来への対話」展（2013年）展示風景
手前：白川昌生《基準ー日本》1990年、北九州市美術館蔵
右奥：木暮伸也《風景から風景》2013年、《鏡田》2008 - 2011年



fig.3 開館記念展「カゼイロ／ハナ 未来への対話」展（2013年）展示風景
手前：照屋勇賢《自分にできることをする》2011年、
中央：ペ・ヨンファン《オブジェクト／福島のため息1》、《オブジェクト／福島のため息2》2012年、
奥：村田峰紀《un》2013年



fig.4 あかつきの村入り口
Port B作品《あかつきの村ウォーク》を開催
（「表現の生態系」展、2019年）



fig.5 滝沢達史×アリスの広場 表現の生態系展の際に開催されたゆったりアーツの様子



fig.6 照屋勇賢《静のエリア》2013年

アーツ前橋における「対話による美術鑑賞プログラム」の 取り組みについて

辻 瑞 生

1. はじめに

展示室内で対話をしながら鑑賞を行う光景は、日本国内でも珍しくなくなっている。学校団体で来館する子どもたちを対象としたプログラムから、ベビーカーでも参加できるような乳幼児連れの親子を対象にしたもの、障害者や高齢者、ビジネスマンを対象にしたプログラムと各館でさまざまな取り組みが行われており、教育普及の活動の中でも重要度を増している活動といえるだろう。対話による鑑賞は、解説に頼らず作品の中に見えたこと、感じたことを複数人で話していくことで、鑑賞を深めていくものである。はじめは言葉にならないような感覚を言葉にすることで思考が整理され、他の人の感じ方や考え方に触れて新しい発見や気づきがあり、異なる考えの他者を理解することにもつながる。⁽¹⁾

当館では「対話的であること」を活動コンセプト⁽²⁾の一つに掲げていることから、対話による美術鑑賞に開館前から手探りながらも取り組んできた。当館での大きな特徴としては、対話をリードするファシリテーション役を学芸員が行うのではなく、研修を受けた市民ボランティアが担っていることが挙げられる。これはアーツ前橋の立ち上がりの事情⁽³⁾によるところでありプログラムの開始当初から市民と積極的に協働している。開館から6年が経過したが、鑑賞プログラムの変化とともにサポーター研修の内容についてはその都度、試行錯誤してきた。本稿では、これまでの活動を振り返り、アーツ前橋の取り組みについて報告したい。

2. 学校連携プログラム「おしゃべりアートツアー」と「鑑賞サポーター」(2013～2016年度)

2013年の開館年度から、アーツ前橋の学校連携事業として学校団体の受け入れや市内の小学校を対象とした「おしゃべりアートツアー」を実施してきた。これは、全国の美術館での先行事例を手本として、市内の小学生がアーツ前橋の借り上げたバスにて学年単位で、休館日や開館前の時間に来館し、研修を受けた鑑賞サポーター(市民ボランティア)と対話による作品鑑賞を数人のグループで行うプログラムである。2013年から2016年までの4年間に18校⁽⁴⁾で実施した。市教育委員会の協力を得ながら進めてきたが、授業時間数の減少で校外へ出ることが難しいという学校側の理由や、大人数を一括で受け入れる場所が館内にないことや実施期間が限定されることなどのアーツ前橋側の事情により、利用が伸びなかった。そのため学校を対象にしたプログラムは、2016年度よりアーティストを学校に派遣するアウトリーチに方向転換し、現在もアーティスト・イン・スクール事業を実施している。⁽⁵⁾

(1) おしゃべりアートツアー

「おしゃべりアートツアー」は、市内の小学校を対象に、バスで来館し、作品を前にしながら対話による美術鑑賞を行うプログラムで、子どもたちがそれぞれに作品を見て、考え、感じたことを市民ボランティアの鑑賞サポーターが受け止めて、より詳しく作品を見ていくことのサポートを行う。対話による作品鑑賞は、正解が一つでないアートをみて、自分の思いや考えを言葉にし、またほかの人の意見を聴くことを通して、観察力や思考力、コミュニケーション力が身につくといわれるが、当館では美術をネ

タに自由におしゃべりしてもらいたいという理由から、「おしゃべりアートツアー」という名称にした。

児童が来館する当日の主な流れは、①鑑賞する際の注意点、当日の流れを説明し、②各班（4～7名程度）に分かれて自己紹介をする、③展示室の作品や交流スペースのコミッションワーク1、2作品で対話による鑑賞を行い、④集合場所に戻り、印象に残った作品の共有などのふりかえりをする、というように行われた。「おしゃべりアートツアー」を実施しての結果と課題は、主に次のことが挙げられる。

①VTS（ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ）

⑥ 以外の鑑賞方法

対話による鑑賞にもさまざまな手法があるが、当館では当初VTSを参考にした。団体来館の小学生を対象とするプログラムは、授業の一環で来館するために、各班によってファシリテーションの技術の差が出ないように、ボランティアの水準を一定に保つことが望ましいと考えた。そのためボランティアの個性を重視することよりも、VTSの手法を用いて、ボランティアに「型」を覚えてもらい、実践する方法をとっていた。

鑑賞する作品は、各班の動線を考慮しながら、あらかじめ学芸員が選定し、1作品15分で2作品を鑑賞するプログラムとした。しかし教員から自由鑑賞を望む声もあったため、後半に自由鑑賞の時間を設けた学校もあった。鑑賞後のふりかえりでも、対話による鑑賞で取り上げた作品よりも、自由鑑賞の時間に見た作品の印象が強かったという子どもの声もあり、VTS以外の鑑賞方法の取り入れや、学校の滞在時間や児童の学習機会や体験の質が均等になることを考慮したうえで、鑑賞方法やそれに準じたサポーターの研修内容の見直しについても検討が必要となった。

②鑑賞と組み合わせた創作活動のプログラムの必要性

交通状況により予定時間よりも早めに到着する学校が多く、時間が余るケースがあった。滞在時間によって実施できない場合もあったが、高橋匡太の〈あかりプロジェクト〉⁽⁷⁾で街路樹の飾りつけを作る「ひかりの実を一緒に作ろう！」というワークショップを実施した学校もあった。アイスブレイクとしての役割を果たしただけでなく、後日、飾りつけされた「ひかりの実」を家族と一緒に探しに来る様子も見られた。

教員のアンケートで工作プログラムの希望が多いこと、児童が来館時の印象に残った出来事に「ひかりの実」づくりをあげる声が多かったことから、学校の滞在時間や受け入れの事前準備の負担を考慮する必要があるが、簡易な創作活動を織り込むことは有効であった。

③受け入れ体制と参加校数

2013年は5校、2014年4校、2015年6校、2016年3校で実施した。このうち4年連続で来館した学校は1校、3年連続が1校で、いずれも近隣の小学校であった。事前広報としては、教頭会、美術主任会、図工主任会、図工実技研修会にて案内資料の配布と口頭説明を行ったほか、教育委員会を通じて各校へメールを配信、各学校の教員分の資料を送付するなどしたが、増加には至らなかった。前橋市では市内全校児童が来館するような仕組みを作ることができなかったことや、大型バスがアーツ前橋の目の前には停車できないために、少し離れた場所で乗降車することの不便さ、校外学習に組み込もうとしても鑑賞の前後にお弁当を食べられる場所が近くないということなども、参加校が増加しなかった理由のひとつと考えられる。

④教員への事業目的や内容の理解促進

窓口になっている教員は、事業目的や企画意図、アーツ前橋の活動内容を理解しているが、当日来館する他の引率の教員にはそれらが伝

わっていないことが多く、教員の介入によって進行に支障が生じるグループもあった。教員を対象とする対話による鑑賞体験会など、周知の機会や来館前に配布する資料の作成、見直しが必要であった。

（２）鑑賞サポーター

「鑑賞サポーター」という名称は、当館のボランティアを「サポーター」と読んでいることから、団体で来館する子どもたちの鑑賞を担当するサポーターということから名付けられた。その研修は、毎年内容や目的を変更しながら実施してきた。2013年は10名、2014年17名、2015年20名、2016年12名の参加があった。

2013年度、2014年度は、①「対話による鑑賞」を体験する②基本となるVTSの考え方を学ぶ③アイスブレイクになるようなワークショップの体験④ガイドプログラムの作成⑤実践と、実践後の検証⑥身体表現によるワークショップ⑦ガイドプログラムの作成⑧ガイドプログラムの実践、という研修内容で実施した。初年度の研修の参加者は35名であったが、研修終了後に活動継続の意思確認をして10名まで絞り込まれた。継続しなかった研修参加者の大半は、アーツ前橋開館前から前橋市が開催する市収蔵作品展で看視経験がある前橋ボランティア連絡会のメンバーであった。作品を解説すると思っていた彼女たちが望む活動との相違により、大半が継続しなかった。

2013年度、2014年度の研修の特徴としては、VTSの手法を学ぶ時間⁽⁸⁾は一日と短く、それよりも児童と一緒に活動する鑑賞サポーター同士のコミュニケーションや雰囲気づくりを大事にしたところである。⁽⁹⁾ 視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップも組み込んだ。

演劇やパフォーマンスのアーティストを講師にして、寝そべって鑑賞したり、股の下から逆さにのぞき込んで鑑賞したり、アイスブレイク代わりに工作したメガネで鑑賞したりするなどより身体的なグループ鑑賞であった。この鑑賞

方法では、対話が活発になるという利点はあるが、児童たちが盛り上がりすぎてしまって、鑑賞サポーターが事態をまとめられなくなる場面もあった。教員からは鑑賞サポータースキルの差が生じていることへの不満の意見も寄せられた。2013年度は休館日や開館前の時間内での実施であったが、2014年度から開館時間内で学校団体を受け入れるようになったため、他の来場者への配慮も必要となった。

2015年度からは、鑑賞サポーターのスキルの差の解消を目的に、ファシリテーションの心構えを基礎から学び、全体のスキルアップを目指した。そこで、行政や美術館での対話型鑑賞やそのファシリテーター育成に実績のある認定NPO法人芸術資源開発機構（ARDA）⁽¹⁰⁾に業務の一部を委託した。三ツ木紀英氏からVTSの基礎を学び、齊藤佳代氏からコーチングを受け、実践に則した研修を行った。

2016年までの2年間はVTSの手法を中心にした対話型鑑賞の手法を学びながらも、おしゃべりアートツアーの導入部分では鑑賞サポーターがそれぞれアイディアを出して、身体を動かしてリラックスした雰囲気づくりやアイスブレイクを実践していた。なかでも特に好評だったのは、作品鑑賞の前に腕回しや背伸び、深呼吸をするもので、児童と鑑賞サポーターの緊張を解く準備運動として機能していた。しかし、これは誰にでも有効というものではなく、鑑賞サポーターの個性によって成立していたように感じた。

限られた時間での研修では、VTSの手法を自分のものにできないままに実践になってしまう場合もあり、鑑賞サポーターが窮屈そうに紋切型に3つの問いかけ⁽¹¹⁾を繰り返し、発言者の言葉をおうむ返ししながらファシリテーションを行う場面も見かけられるようになった。そこで鑑賞サポーターの役割を明確にしようと、アーツ前橋が考える鑑賞サポーター像を明文化したのが、次の3つである。

①鑑賞サポーターのパーソナリティやトークス

タイトルを大切にします。

②主人公は鑑賞者であり、鑑賞者の「見る力」を信じて、アーツナビゲーターは鑑賞者の発言から会話をつなげていく進行役になる。

③対話する中で、作品や作家について情報提供することもあるが、提供した情報によって一方的な見方にならないように注意する。

このように研修ではVTSの3つの投げかけを発言のきっかけのために取り入れるが、この手法にこだわらず、作品を見ながら楽しい時間を過ごしてもらえよう雰囲気づくりを大事していくことを改めて確認した。

3. 対象を児童から一般へ

「VTS」から情報提供型へ（2017年度～）

（1）アーツナビゲーター

このように手法を変えながらも、学校団体を受け入れてきたが、バス費用を削減されたことや参加校が伸びなかったことなどから、2016年度でおしゃべりアートツアーを終了することになった。⁽¹²⁾ しかし本事業を支えている鑑賞サポーターは、おしゃべりアートツアー以外にも、中学生以下の子どもとその保護者を対象とした「こどもアート探検」や、学芸員のギャラリートツアーのサポーターとして活動の幅を広げていた。さらにこれまでも鑑賞サポーターから、活動の場を増やすために一般対象に鑑賞会を実施したいという意見があったため、対象を変更して継続することにした。2017年度から、まずは、企画展⁽¹³⁾ 会期中の関連イベントで、「おしゃべりアートデイズ／ウィーク」として美術館に来館する大人から子どもまで対象を広げて、再スタートすることにした。それに伴い鑑賞サポーターから「アーツナビゲーター」へと改名した。

対象を児童から一般来場者に変更したことで、ファシリテーションの手法も変更した。鑑賞ツアーなどの参加者は、「解説ではない」鑑賞会であったとしても、何らかの作品を読み解くヒントを求めている人が少なくない。これま

ではVTSの手法の則り、作品や作家についての情報は提供しないようにしてきたが、状況によっては情報提供することで作品解釈に近づけて行けるのではないかと考えて、今後は各自の判断でタイトルや制作年や背景などを端的に伝えてもよいことにした。これによって解説的な情報を欲している鑑賞者に対しても、自由に鑑賞したい人にもアピールできると考えた。しかしながら、この変更はアーツナビゲーターを困惑させ、負担も大きくさせた。VTSのファシリテーションであっても作品研究は欠かすことのできない作業であるが、情報提供する場合は、その内容や分量、提供するタイミングの判断がより難しくなる。情報を提供したことで、一方的な見方に誘導してしまうのは避けるべきであるし、鑑賞者よりもナビゲーターの発言量が多くならないようにと、以前よりも注意すべきことが増えた。鑑賞者からのさまざまな意見や鑑賞を、事実やデータ、作家の思いなどとリンクさせながら対話を進めて行くには、VTSのスキルだけでなく、さまざまなシミュレーションを行う必要がある。ガイドプラン作成の課題が加わり、これまでと比較しても課題にかかる労力と時間が増える結果となった。この変更により、もともと児童との関わりを望んで参加した人や、情報提供の難しさや課題の多さからアーツナビゲーターを更新しない人が出たため、2016年は12名だった参加者は、2017年の終了時には継続者が8人となった。

またこの年はフリーアナウンサーを講師に個性を生かしながらも相手に伝わる話し方講座を開催したほか、さまざまな対話による鑑賞を体験することを目的に、一般社団法人アーツアライブの「アートルリップ」⁽¹⁴⁾の鑑賞を体験した。

（2）おしゃべりアートデイズ

2017年度から2019年度までは、展覧会の会期中後半の1週間に「おしゃべりアートデイズ」と称して対話による鑑賞会を実施した。2017年度

は、約1時間で3作品を鑑賞するプログラムを、はじめ午前と午後の1日2回開催していたが、2展覧会目からは平日は午後のみ、土日祝は午前午後の2回と回数を減らした。さらに2018年度からは、鑑賞作品を2作品にして約30分のプログラムに変更した。

対象を一般来場者向けのプログラムに変更したが、当初から参加者集めには苦勞しており、アーツナビゲーターの友人や知人、アーツ前橋のサポーターなどが参加者の大半をしめている。事前申し込みで参加者が集まらない回などは、来場者に直接声をかけて参加者を募ることも多くなったため、鑑賞時間が1時間から30分に短縮したことで気軽に参加することができ、終了後に展覧会をもう一度自分のペースで鑑賞することもできた。2019年度は、年間スケジュールのチラシを作成するなどして、周知をはかったが伸びなかった。2020年度からは、月2回の定期開催への変更を検討している。

4. 2019年度の事例から

2019年現在、展覧会の会期中後半の1週間に「おしゃべりアートデイズ」と称して対話による作品鑑賞会を開催している。アーツナビゲーターが進行役をつとめ、各作品15分程度で2作品を鑑賞する。事前申し込み制で定員6名としているが、参加者が少なく、アーツナビゲーターの知人、友人やサポーター、当日飛び入りの人たちが参加しているのが実情である。作品選びはアーツナビゲーターが選定し、あらかじめ作品や作家について下調べを行い、対話を想定したガイドプランを作成する。アーツナビゲーターは2人1組となり、それぞれが1作品ずつファシリテーションを行い、ファシリテーションをしないときは、サブ役となって、全体の様子を見たり、タイムキーパーをしたり、ほかの来館者への対応を行う。2019年度は、30代から70代の男女10名が活動している。対話中は、参加者からの発話を基軸に作品と一緒に鑑賞しながら、状況によっては作品のタイトルや作者名、時代背

景などの情報を伝えることもある。その情報提供のタイミングや分量などが、いつも研修の際に議論にあがる。

ここでは、「山本高之とアーツ前橋のビヨンド20XX 未来を考えるための教室」⁽¹⁵⁾（以下、ビヨンド展）での事例をもとに報告をする。

この展覧会は、アーティストの山本高之とアーツ前橋の学芸員が〈美術〉を通じた学びとは何かを共に議論し、これからの〈美術／美術館〉の役割を考えることを目的に開催した。学芸員が「コレクション」、「地域アートプロジェクト」そして「市民との協働」という視点からこれまでのアーツ前橋の活動を振り返るセクションを担当し、収蔵作品やプロジェクトのドキュメント映像などを展示。後半は山本が前橋市民、子どもたちとワークショップで関わりながら取り組んだ新作《ビヨンド2020 道徳と芸術》(fig. 1)を展示するセクションで構成された。

アーツナビゲーターは、毎回展示作品の中からそれぞれ対話したいと思う作品を自由に選ぶが、映像作品や、複数で鑑賞するには小さいと思われる作品は選ばれずに除かれやすく、一方、展覧会のメインビジュアルのような作品は選ばれやすい。これまでのおしゃべりアートデイズでは、作品1点の独立した鑑賞を行ってきた。作品選定をする上では、対話がしやすいような作品を1点目にして、抽象度の高い作品を2点目にするなどのシーケンスを考えることもあるが、作品鑑賞を通して展覧会の意図や構成やコンセプトへと深めていくことは意識してこなかった。

ビヨンド展では、「2点を選ぶとしたら、どんな構成が参加者にとって充実した内容になるか」、「展覧会の構成やコンセプトまで課題を広げていくためには、ナビゲーターとして何ができるか」ということを新たな課題として取り組んだ。前者についてはナビゲーターの大半が、両セクション前半と後半から1点ずつ選ぶことで、山本とアーツ前橋学芸員の共同企画で

あることを伝えようとしていた。後者については、情報提供のタイミングとバランスについて意見が交わされた。例えば《ビヨンド2020 道徳と芸術》のなかの〈市議会議員のポートレート〉(fig. 2)は、事前のワークショップで子どもたちが市議会議員の顔写真を見ながら制作した肖像画36点(fig. 3)と、子どもたちが出来上がった肖像画の名前を呼びあげる映像、そして月球儀と「おはしも」と書かれた黒板からなる作品であるが、アーツナビゲーターからは、どのようなファシリテーションが可能か、意見が交わされた。その中で主に次の3つの意見について話し合われた。

- ①市議会議員に対してリアリティがあるかないか、立場によっては選びにくい。
- ②作者の制作意図が、はっきりわからない。
- ③絵と映像などで一つの作品であるが、すべて鑑賞することは可能か。

①については、前橋市の市議会議員を身近に感じている人には、生々しさがあり、作品ではなく、人物についての話になってしまうのではないかという不安や、政治的な見解や支持政党、議員との関係性につながる懸念があり、純粋に鑑賞することが難しいといった意見があった。一方で、前橋市議会についての知識を持たない人にとっては、ポートレートの人物が実在するどうかさえかわからないので、特定の個人について話をするのではなく、鑑賞者を含めて、どのように読み解き、作品の中での関係性を紡いでいくのが大切であり、これまで扱っている作品と大きな違いはないように感じるという意見があった。

②について、本作には政治的なメッセージがあるかもしれないが、政治思想ではなく、普段私たちが意識していないことを議論し、問題化する場を、作者が作り出していることが大切ではないかということが話し合われた。この作品には解説キャプションは掲出されていないが、山本による章解説(fig. 4)が展示室の入口に全体導入として掲出されている作品のコンセプトや

作品の説明という扱いではなく、テキストも作者の作品の一部であって、鑑賞者がテキスト情報を知ったからと言って、鑑賞が大きく左右されるものではないだろうから、前提としての情報を提供することで、より活発に発言がなされるのではないかという意見が出た。

③については、複数で構成されるインスタレーションなどの場合、作品情報が多すぎて、話題が散漫になってしまうことや、15分という限られた時間では話し足りないということが想定される。また吹き抜けのある地下の展示室であるために、1階の展示室からも音声聞こえてくることがあり、作品に集中して鑑賞しにくい状況であるという懸念点があがった。

本作品は人々の無関心さや興味をざわつかせようとする作者の意図が含まれているかもしれないが、作家が作品として提示することや作家の意図を伝えることが、アーツナビゲーターの役割ではない。アーツナビゲーターも一人の鑑賞者であり、〈市議会議員のポートレート〉の捉え方や感じ方が異なるのは当然であり、前橋で地域活動し、議員の顔も名前もよく知っている人が選ぶにはリスクが想定されるだろうということが話しあわれた。

5. 今後の課題

おしゃべりアートデイズの対象を一般来場者に変更したことで、アーツナビゲーターの参加者数が減少したことは既に述べた。おしゃべりアートデイズの参加者が集まらず、アーツナビゲーターの活動の場を増やすことができていないが、ナビゲーターそれぞれが館外にて、自分たちで活動の場を広げている。例えば、アーツ前橋サポーター有志のグループ展で対話型鑑賞会を企画した者や、「対話型アート鑑賞ラボ」を立ち上げて自主的に対話型鑑賞を学びながら県内の美術館や芸術祭などで鑑賞会を実施している者、自身の専門分野である文学に対話型鑑賞を応用しようとする者もいて、事業の波及効果とみることができる。それぞれが活躍する今、当館での継続のモチベー

ションを維持していけるように活動の機会を増やし研修に新たな取り組みを行っていききたい。

すでに、2018年度からアーツナビゲーターがおしゃべりアートデイズの担当シフトを決定したり、当日の運営をアーツナビゲーターだけでできるような体制作りをはじめた。2018年度までは無料のグループウェアサイボウズLiveを利用して、自主研修の日程調整や意見交換などに活用していたが、サービス終了に伴いWix.comでウェブサイト⁽¹⁶⁾を立ち上げた。誰でも閲覧できる活動紹介と、会員のみが閲覧できる部分に分かれており、新たな広報ツールとしても期待してる。しかしパソコンに不慣れな人も多く、得意とするメンバーに負担がかかってしまうこともあった。彼らは無償ボランティアであるので、過度に負担をかけないよう配慮しながら、持続可能な仕組みを考えていく必要がある。

6. おわりに

アーツ前橋は同時代の作家の作品を展示する機会が多い。これまで秋の企画展などは、衣食住、医療、福祉、教育などを私たちに身近なテーマを取り扱ってきたが、現代美術というとは一般的には難解と捉えられがちであることは否定できない。誰でもが気軽に現代美術と対話できるような活動が必要であることは、開館当初から認識しつつ、「創造的であること／対話的であること／共有すること」を活動コンセプトに定めて事業を実施してきた。

対話型鑑賞プログラムは、この3つに適うものであると考え、開館前から活動してきたが事業を実施するうえで様々な課題に直面し、試行錯誤を続けている。2020年度からは、実施時期を展覧会の後半の1週間から、毎月第3金・土曜日に定例化することで、事業の周知を目指す。また当館の受付看視スタッフの研修に取り入れることで事業の理解を深めて、日ごろの業務に役立てたり、サポーターやメンバーシップ会員へ参加を呼び掛けて対話型鑑賞の楽しさを体験してもらうなど、事業自体を盛り上げながら、主

体的な鑑賞者の育成にもつなげていきたい。

最後に本事業実施にあたり、プログラムの試行錯誤に気長に付き合ってくださいという市民ボランティアのアーツナビゲーターのみなさんと、第1回研修から伴走してくださる講師の齊藤佳代氏に厚く御礼を申し上げます。

-
- (1) アーツ前橋ではヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズを参考に開始し、現在は情報提供を行う方法も採用している
 - (2) アーツ前橋では「創造的であること」「みんなで共有すること」「対話的であること」の3つを活動コンセプトとしている
 - (3) 美術館開設前の2014年に前橋市芸術文化施設運営検討委員会から「芸術文化施設のあり方に関する提言書」が提出され、この中で「前橋市民が、経営管理、企画運営、評価、推進のいずれの分野にも主体的に関わりを持てるようなシステムの構築を目指すこと」が盛り込まれた。アーツ前橋の各事業を検討する際に、市民参加を積極的に取り入れた
 - (4) 2013年度5校、2014年度4校、2015年度6校、2016年度3校。詳細は付属資料の活動一覧を参照。
 - (5) アーツ前橋のアーティスト・イン・スクール事業については、小田久美子「アーティスト・イン・スクール教科のあいだに広がる想像力」アーツ前橋研究紀要1を参照
 - (6) 1991年からニューヨーク近代美術館で始められた教育プログラムで、対話による作品鑑賞を通して「観察力」「批判的思考力」「コミュニケーション力」の効果が期待できるという。
 - (7) 2015年12月5日から2016年1月12日まで〈あかりプロジェクト〉、2016年9月22日から11月5日まで〈前橋ひかりの45DAYS〉を開催した。ワークショップでは、参加者が果実袋に笑顔を描き、袋の中に小さなLEDを入れた「光の実」をつくり、アーツ前橋近くの樹木に飾りつけ、期間中に点灯させた。
 - (8) 齊藤佳代氏（当時、東京国立近代美術館工芸館）を講師に招き、対話型鑑賞について学んだ。2015年以降、齊藤氏に講師を依頼している。
 - (9) おしゃべりアートデイズでは、一人がメインでファシリテーションを担当し、もう一人がサブ役となって、一人では目が届かないところをお互いにカバーできるように二人体制にし、発言が少ない児童へ寄り添えるよう心がけた。
 - (10) 西東京市や大和市などの行政や、佐倉市立美術館などの美術館でのボランティアの育成などの実績がある。
 - (11) VTSでは「この作品の中でどんな出来事が起こってい

ますか」「作品のどこからそう思いましたか」「ほかに気づいたことはありませんか」の3つの問いかけを繰り返しながら振興していく。

(12) 現在も団体来館を希望する学校には、学芸員による解説や対話型鑑賞を実施することとしているが、これまで問い合わせはほとんどない。

(13) 「コレクション+ アートの秘密 私と出会う5つのアプローチ (2017年7月21日から9月26日、アーツ前橋)

(14) 高齢者や認知症や障害のある方とその家族と一緒に参加できる対話による作品鑑賞会

(15) 2019年7月19日から9月19日までアーツ前橋で開催された。

(16) <https://artsgunmanet.wixsite.com/artsnavigator>



fig.1 山本高之《ビヨンド2020 道徳と芸術》



fig.2 山本高之《市議会議員のポートレート》

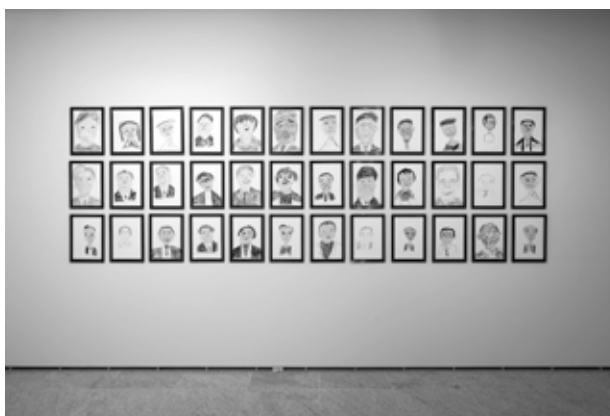


fig.3 事前ワークショップで子どもたちが
市議会議員の顔写真を見ながら制作した肖像画



fig.4 掲出された章説明

【資料】 活動写真

おしゃべりアートツアー
(2013～2016年度)



2016年度実施



2014年度実施



2016年度実施

鑑賞サポーター研修 (2013～2016年度)
アーツナビゲーター研修 (2017年度～)



2014年度実施



2015年度実施



2015年度実施



2016年度実施



2017年度実施 ※受付看視スタッフとの合同研修

こどもアート探検 (2016年度～)



2017年度

おしゃべりアートデイズ (2017年度～)



2017年度実施



2018年度実施

活動一覧

【2013年度】

(1) 鑑賞サポーター研修

年	日付	曜日	時間	内容	外部講師	会場	参加者数
2013年	6月26日	水	13:00-15:00	「オリエンテーション」	-	中央公民館	鑑賞サポーター35人
2013年	7月16日	火	13:00-15:00	「ことばで鑑賞する」	齊藤佳代	アーツ前橋	鑑賞サポーター34人
2013年	8月6日	火	13:00-15:00	「ガイドプログラムをつくってみよう」	-	アーツ前橋	鑑賞サポーター35人
2013年	8月28日	水	9:00-13:00	「おしゃべりガイドに挑戦」(城南小学校 6年)	-	中央公民館	小学6年生94人 鑑賞サポーター36人
2013年	9月17日	火	13:00-15:00	「からだで鑑賞する」	小出和彦	アーツ前橋	鑑賞サポーター32人
2013年	10月15日	火	14:00-16:00	「ガイドプログラムをつくってみよう」	郡司明子	中央公民館	鑑賞サポーター30人
2013年	11月5日	火	14:00-16:00	「ガイドプログラムをためしてみよう」	郡司明子	中央公民館	鑑賞サポーター30人
2013年	11月27日	水	12:00-16:00	「おしゃべりガイドに挑戦Part.2」 (桃井小学校 6年)	-	中央公民館、アーツ前橋	小学6年生57人 鑑賞サポーター30人

(2) おしゃべりアートツアー

年	日付	曜日	時間	展覧会／学校・学年	担当	会場	参加者数
2013年	8月28日	水	9:00-13:00	プレオープン展示「からだは語る」／城南小学校6年	-	中央公民館	小学6年生94人 鑑賞サポーター36人
2013年	11月27日	水	12:00-16:00	カゼイロノハナ展／桃井小学校6年	-	中央公民館、アーツ前橋	小学6年生57人 鑑賞サポーター30人
2013年	12月18日	水	10:00-11:30	カゼイロノハナ展／朝倉小学校3年、4年	-	中央公民館、アーツ前橋	小学3年生、4年生70人 鑑賞サポーター6人
2014年	1月22日	水	10:00-11:30	カゼイロノハナ展／大胡小学校3年	-	中央公民館、アーツ前橋	小学3年生70人 鑑賞サポーター6人
2014年	1月23日	木	9:30-11:00	カゼイロノハナ展／宮城小学校4年	-	中央公民館、アーツ前橋	小学4年生54人 鑑賞サポーター6人

【2014年度】

(1) 鑑賞サポーター研修

年	日付	曜日	時間	内容	外部講師	会場	参加者数
2014年	9月6日	土	13:00-16:00	各種アイスブレイク、パフォーミング鑑賞劇	茂木一司、小出和彦	中央公民館	21人
2014年	9月13日	土	13:00-16:00	対話型鑑賞についてのレクチャー、対話型鑑賞の体験	茂木一司、手塚千尋	アーツ前橋	15人
2014年	9月27日	土	13:00-16:00	美術館の役割についてレクチャー、展覧会紹介 ＊サポーター研修(アーツスクールSコース)と合同開催	茂木一司	中央公民館	12人
2014年	10月15日	水	11:00-16:00	視覚障害者との作品鑑賞体験	視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ	アーツ前橋	16人
2014年	10月22日	水	11:00-16:00	展覧会、コミッションワークのレクチャー	-	アーツ前橋	10人
2014年	12月14日	日	14:00-16:00	ふりかえり	-	アーツ前橋	14人

(2) おしゃべりアートツアー

年	日付	曜日	時間	展覧会／学校・学年	担当	会場	参加者数
2014年	12月2日	火	10:40-12:20	服の記憶展／大胡小学校・3年	-	中央公民館、アーツ前橋	小学3年生84人 鑑賞サポーター10人
2014年	12月5日	金	13:40-15:10	服の記憶展／桃井小学校・6年	-	中央公民館、アーツ前橋	小学6年生48名 鑑賞サポーター12人
2014年	12月9日	火	14:00-15:20	服の記憶展／朝倉小学校・4年	-	中央公民館、アーツ前橋	小学校4年生36人 鑑賞サポーター8人
2014年	12月11日	木	14:00-15:00	服の記憶展／嶺小学校・2-6年	-	中央公民館、アーツ前橋	小学2-6年生13人 鑑賞サポーター7人

【2015年度】

(1) 鑑賞サポーター研修

年	日付	曜日	時間	内容	外部講師	会場	参加者数
2015年	7月25日	土	13:00-16:06	アーツ前橋について、各種アイスブレイク、グループディスカッション	茂木一司	中央公民館	19人
2015年	8月8日	土	10:30-17:30	基礎研修(対話による鑑賞法について)	三ツ木紀英／ARDA	中央公民館	24人
2015年	8月22日	土	10:30-17:30	基礎研修(聞く・応答ワークショップ、作品研究について)	三ツ木紀英／ARDA	中央公民館	22人
2015年	10月14日	水	10:30-17:30	実践研修(ファシリテーション、コーチング)	齊藤佳代／ARDA	中央公民館、アーツ前橋	14人
2015年	11月11日	水	10:30-15:30	実践研修(ファシリテーション、コーチング)	齊藤佳代／ARDA	中央公民館、アーツ前橋	16人
2015年	12月9日	水	10:30-15:30	実践研修(ファシリテーション、コーチング)	齊藤佳代／ARDA	中央公民館、アーツ前橋	11人

アーツ前橋における「対話による美術鑑賞プログラム」の
取り組みについて

2016年	3月23日	水	10:30～15:30	実践研修（ファシリテーション、コーチング）	三ツ木紀英、齊藤佳代 /ARDA	中央公民館、アーツ前橋	15人
2016年	3月30日	水	13:00～16:00	ふりかえり	-	中央公民館	9人

(2) おしゃべりアートツアー

年	日付	曜日	時間	展覧会／学校・学年	担当	会場	参加者数
2015年	11月6日	金	11:00～12:20	ここに棲む展／県立聾学校小学部1～6年	鑑賞サポーター	アーツ前橋	小学1～6年生37人 鑑賞サポーター13人
2015年	11月10日	火	13:45～15:05	ここに棲む展／筑井小学校4年	鑑賞サポーター	中央公民館、アーツ前橋	小学4年生57人 鑑賞サポーター9人
2015年	11月26日	木	10:40～11:25	おしゃべりアートツアー事前授業／朝倉小学校	アーツ前橋学芸員	朝倉小学校	小学4年生20人
2015年	12月3日	木	11:00～12:20	ここに棲む展／大胡小学校3年	鑑賞サポーター	中央公民館、アーツ前橋	小学3年生88人 サポーター11人
2015年	12月4日	金	13:30～14:40	ここに棲む展／月田小学校4～6年	鑑賞サポーター	アーツ前橋	小学4～6年生37人 鑑賞サポーター10人
2015年	12月8日	火	10:50～12:00	ここに棲む展／朝倉小学校4年	鑑賞サポーター	アーツ前橋	小学4年生22人 鑑賞サポーター7人
2015年	12月18日	金	13:40～15:10	ここに棲む展／桃井小学校6年	鑑賞サポーター	中央公民館、アーツ前橋	小学6年生43人 鑑賞サポーター12人

【2016年度】

(1) 鑑賞サポーター研修

年	日付	曜日	時間	内容	外部講師	会場	参加者数
2016年	6月25日	土	10:00～17:30	オリエンテーション、基礎研修	三ツ木紀英	中央公民館	11人
2016年	6月26日	日	10:30～17:30	基礎研修	三ツ木紀英	中央公民館	8人
2016年	8月10日	水	10:30～15:30	実践研修（ナビゲーション、コーチング）	齊藤佳代	アーツ前橋	9人
2016年	9月7日	水	10:30～16:00	実践研修（ナビゲーション、コーチング）	齊藤佳代	アーツ前橋	8人
2016年	10月5日	水	10:30～16:00	身体表現ワークショップ	藤田善宏	中央公民館	10人
2016年	11月9日	水	10:30～16:00	実践研修（ナビゲーション、コーチング）、 作品研究について	齊藤佳代	中央公民館	8人
2017年	2月15日	水	10:30～16:00	実践研修（ナビゲーション、コーチング）	齊藤佳代	中央公民館	10人
2017年	3月22日	水	10:30～16:00	情報提供型のナビゲーションの実践、ガイド プランの検討	齊藤佳代	中央公民館	8人
2017年	3月29日	水	13:00～16:00	ふりかえり	-	中央公民館	8人

(2) おしゃべりアートツアー

年	日付	曜日	時間	展覧会／学校・学年	担当	会場	参加者数
2016年	11月7日	月	10:45～11:50	フードスケープ展／城東小学校6年	鑑賞サポーター	アーツ前橋、にぎわいホール	小学6年生50人 鑑賞サポーター4人
2016年	12月6日	火	14:00～15:00	フードスケープ展／朝倉小学校4年	鑑賞サポーター	アーツ前橋、にぎわいホール	小学校4年生25人 鑑賞サポーター8人
2016年	12月20日	火	14:00～15:20	フードスケープ展／桃川小学校6年	鑑賞サポーター	アーツ前橋、にぎわいホール	小学70人 鑑賞サポーター、サポーター13人

(3) こどもアート探検、おしゃべりアートツアー ＊一般の子ども対象に不定期で鑑賞会を開催

年	日付	曜日	時間	展覧会	担当	会場	参加者数
2016年	7月2日	土	14:00～15:00	「新収蔵作品展2016」おしゃべりアートツアー	鑑賞サポーター	ギャラリー	14人
2016年	8月20日	土	14:00～15:00	「コレクション+」「表現の森」展 こども アート探検	鑑賞サポーター	ギャラリーほか	25人
2016年	11月3日	木	14:00～14:30	「フードスケープ」展 こどもアート探検	鑑賞サポーター	ギャラリーほか	9人
2017年	3月25日	土	14:00～14:30	「ArtMeets04」展 こどもアート探検	鑑賞サポーター	ギャラリーほか	25人
2017年	5月21日	日	14:00～14:30	「ArtMeets04」展 こどもアート探検	鑑賞サポーター	ギャラリーほか	11人

【2017年度】

(1) アーツナビゲーター研修 ＊鑑賞サポーターから名称変更

年	日付	曜日	時間	内容	外部講師	会場	参加者数
2017年	6月24日	土	10:30～16:00	オリエンテーション	-	スタジオ	15人
2017年	7月12日	水	10:30～16:00	対話による鑑賞を体験、ワークショップ、 鑑賞のメカニズムについてレクチャー	齊藤佳代	スタジオ	15人
2017年	7月26日	水	10:30～16:00	対話を通じた鑑賞についてのレクチャー、付箋 ワークショップ、作品研究についてのレクチャー	齊藤佳代	スタジオ、ギャラリー	15人
2017年	8月9日	水	10:30～16:00	実践研修（ナビゲーション、コーチング）	齊藤佳代	スタジオ、ギャラリー	14人
2017年	8月26日	土	10:30～16:00	実践研修（ナビゲーション、コーチング）	齊藤佳代	スタジオ、ギャラリー	11人
2017年	9月13日	水	10:30～16:00	実践研修（ナビゲーション、コーチング）	齊藤佳代	スタジオ、ギャラリー	16人
2017年	9月14日	木	11:00～16:00	補講	齊藤佳代	スタジオ、ギャラリー	12人
2017年	10月11日	水	13:30～17:00	ふりかえり	-	スタジオ	12人

2017年	11月22日	水	13:00～16:00	スキルアップ研修（話し方研修）	奈良のりえ	スタジオ	8人
2017年	12月13日	水	13:00～16:30	実践研修（ナビゲーション、コーチング）	齊藤佳代	スタジオ、ギャラリー	7人
2017年	12月14日	木	13:00～16:30	実践研修（ナビゲーション、コーチング）	齊藤佳代	スタジオ、ギャラリー	6人
2018年	3月21日	水	14:00～16:00	アートトリップの鑑賞プログラム見学	一般社団法人アーツアライブ 認定アートコンダクター	スタジオ	5人

(2) おしゃべりアートウィーク *対象を学校団体から一般来場者へ変更し名称変更した

年	日付	曜日	時間	展覧会	担当	会場	参加者数
2017年	9月18日	月	11:00～12:00	アートの秘密展	アーツナビゲーター	ギャラリー	12人
2017年	9月18日	月	14:00～15:00	アートの秘密展	アーツナビゲーター	ギャラリー	8人
2017年	9月19日	火	11:00～12:00	アートの秘密展	アーツナビゲーター	ギャラリー	9人
2017年	9月19日	火	14:00～15:00	アートの秘密展	アーツナビゲーター	ギャラリー	9人
2017年	9月21日	木	11:00～12:00	アートの秘密展	アーツナビゲーター	ギャラリー	9人
2017年	9月21日	木	14:00～15:00	アートの秘密展	アーツナビゲーター	ギャラリー	7人
2017年	9月22日	金	11:00～12:00	アートの秘密展	アーツナビゲーター	ギャラリー	8人
2017年	9月22日	金	14:00～15:00	アートの秘密展	アーツナビゲーター	ギャラリー	11人
2017年	9月23日	土	11:00～12:00	アートの秘密展	アーツナビゲーター	ギャラリー	11人
2017年	9月23日	土	14:00～15:00	アートの秘密展	アーツナビゲーター	ギャラリー	11人
2017年	9月24日	日	11:00～12:00	アートの秘密展	アーツナビゲーター	ギャラリー	7人
2017年	9月24日	日	14:00～15:00	アートの秘密展	アーツナビゲーター	ギャラリー	11人
2018年	1月8日	月	11:00～12:00	ヒツクリコ ガツクリコ展	アーツナビゲーター	ギャラリー	9人
2018年	1月8日	火	14:00～15:00	ヒツクリコ ガツクリコ展	アーツナビゲーター	ギャラリー	5人
2018年	1月9日	木	14:00～15:00	ヒツクリコ ガツクリコ展	アーツナビゲーター	ギャラリー	7人
2018年	1月11日	金	14:00～15:00	ヒツクリコ ガツクリコ展	アーツナビゲーター	ギャラリー	9人
2018年	1月12日	土	14:00～15:00	ヒツクリコ ガツクリコ展	アーツナビゲーター	ギャラリー	6人
2018年	1月14日	日	11:00～12:00	ヒツクリコ ガツクリコ展	アーツナビゲーター	ギャラリー	7人
2018年	1月14日	日	14:00～15:00	ヒツクリコ ガツクリコ展	アーツナビゲーター	ギャラリー	9人

(3) こどもアート探検

年	日付	曜日	時間	展覧会	担当	会場	参加者数
2017年	5月21日	日	14:00～14:30	こどもアート探検（ArtMeets04）	学芸員、サポーター	ギャラリー1	11人
2017年	6月25日	日	14:00～14:30	こどもアート探検（コレクション展）	学芸員、サポーター	交流スペース、ギャラリー	49人
2017年	8月19日	土	14:00～15:30	こどもアート探検（コレクション+展）	学芸員、サポーター	ギャラリー	18人
2017年	11月26日	日	14:00～14:30	こどもアート探検（ヒツクリコガツクリコ展）	アーツ前橋サポーター	交流スペース	24人
2018年	2月24日	土	14:00～14:30	こどもアート探検（彼女たちのまなざし展）	学芸員、サポーター	ギャラリー1	22人

【2018年】

(1) アーツナビゲーター

年	日付	曜日	時間	内容	外部講師	会場	参加者数
2018年	7月1日	日	13:30～15:00	アーツナビゲーター説明会	-	スタジオ	6人
2018年	7月15日	日	10:30～16:30	基礎研修（対話による鑑賞を体験、付箋ワーク、レクチャー）	齊藤佳代	スタジオ、ギャラリー	14人
2018年	8月3日	金	10:30～16:30	実践研修（ナビゲーション、コーチング）	齊藤佳代	ギャラリー、サポータールーム	7人
2018年	8月4日	土	10:30～16:30	実践研修（ナビゲーション、コーチング）	齊藤佳代	ギャラリー、サポータールーム	12人
2018年	9月8日	土	10:30～16:30	実践研修（ナビゲーション、コーチング）	齊藤佳代	ギャラリー1、スタジオ	12人
2018年	11月16日	金	10:30～15:30	実践研修（ナビゲーション、コーチング）	齊藤佳代	ギャラリー	8人
2018年	11月17日	土	10:30～16:30	実践研修（ナビゲーション、コーチング）	齊藤佳代	ギャラリー	14人
2019年	3月1日	金	10:30～16:30	実践研修（ナビエーション、コーチング）、面談	齊藤佳代	ギャラリー、サポータールーム	13人
2019年	3月2日	土	10:30～16:30	実践研修（ナビエーション、コーチング）、面談	齊藤佳代	ギャラリー、サポータールーム	7人

(2) おしゃべりアートデイズ *開催日数を検討するため、名称を「ウィーク」から「デイズ」に変更

年	日付	曜日	時間	展覧会	担当	会場	参加者数
2018年	5月10日	木	14:00～15:00	横堀角次郎展	アーツナビゲーター	地下ギャラリー	8人
2018年	5月11日	金	14:00～15:00	横堀角次郎展	アーツナビゲーター	地下ギャラリー	8人
2018年	5月12日	土	11:15～12:15	横堀角次郎展	アーツナビゲーター	地下ギャラリー	8人
2018年	5月13日	日	11:15～12:15	横堀角次郎展	アーツナビゲーター	地下ギャラリー	6人
2018年	5月13日	日	14:00～15:00	横堀角次郎展	アーツナビゲーター	地下ギャラリー	11人
2018年	5月14日	月	14:00～15:00	横堀角次郎展	アーツナビゲーター	地下ギャラリー	11人
2018年	5月15日	火	14:00～15:00	横堀角次郎展	アーツナビゲーター	地下ギャラリー	9人
2018年	8月20日	月	14:00～14:30	時をつなぐ展（所蔵作品展）	アーツナビゲーター	ギャラリー1	10人
2018年	8月21日	火	14:00～14:30	時をつなぐ展（所蔵作品展）	アーツナビゲーター	ギャラリー1	7人
2018年	8月23日	木	14:00～14:30	時をつなぐ展（所蔵作品展）	アーツナビゲーター	ギャラリー1	5人
2018年	8月24日	金	14:00～14:30	時をつなぐ展（所蔵作品展）	アーツナビゲーター	ギャラリー1	6人

2018年	8月25日	土	11:15-12:15	時をつなぐ展（所蔵作品展）	アーツナビゲーター	ギャラリー 1	5人
2018年	8月25日	土	14:00-14:30	時をつなぐ展（所蔵作品展）	アーツナビゲーター	ギャラリー 1	7人
2018年	8月26日	日	14:00-14:30	時をつなぐ展（所蔵作品展）	アーツナビゲーター	ギャラリー 1	9人
2018年	8月26日	日	14:00-14:30	時をつなぐ展（所蔵作品展）	アーツナビゲーター	ギャラリー 1	12人
2018年	12月3日	月	14:00-14:30	岡本太郎展	アーツナビゲーター	ギャラリー	8人
2018年	12月4日	火	14:00-14:30	岡本太郎展	アーツナビゲーター	ギャラリー	4人
2018年	12月6日	木	14:00-14:30	岡本太郎展	アーツナビゲーター	ギャラリー	7人
2018年	12月7日	金	14:00-14:30	岡本太郎展	アーツナビゲーター	ギャラリー	7人
2018年	12月8日	土	11:15-11:45	岡本太郎展	アーツナビゲーター	ギャラリー	11人
2018年	12月8日	土	14:00-14:30	岡本太郎展	アーツナビゲーター	ギャラリー	8人
2018年	12月9日	日	11:15-11:45	岡本太郎展	アーツナビゲーター	ギャラリー	7人
2018年	12月9日	日	15:00-15:30	岡本太郎展	アーツナビゲーター	ギャラリー	10人
2019年	3月18日	月	14:00-14:30	近藤嘉男展	アーツナビゲーター	ギャラリー 1	6人
2019年	3月19日	火	14:00-14:31	近藤嘉男展	アーツナビゲーター	ギャラリー 1	8人
2019年	3月21日	木	14:00-14:33	近藤嘉男展	アーツナビゲーター	ギャラリー 1	4人
2019年	3月22日	金	14:00-14:34	近藤嘉男展	アーツナビゲーター	ギャラリー 1	5人
2019年	3月23日	土	14:00-14:35	近藤嘉男展	アーツナビゲーター	ギャラリー 1	9人
2019年	3月24日	日	14:00-14:36	近藤嘉男展	アーツナビゲーター	ギャラリー 1	9人

(3) こどもアート探検

年	日付	曜日	時間	展覧会	担当	会場	参加者数
2018年	5月12日	土	15:30-16:00	ArtMeets05	アーツナビゲーター	地下ギャラリー	17人
2018年	11月10日	土	14:00-14:30	岡本太郎展	アーツナビゲーター	ギャラリー1	10人
2019年	3月23日	土	15:00-15:30	近藤嘉男展	アーツナビゲーター	ギャラリー1	5人

【2019年度】

(1) アーツナビゲーター

年	日付	曜日	時間	内容	外部講師	会場	参加者数
2019年	5月25日	土	10:30-16:00	やなぎみわ作品でのナビゲーション、コーチング、作品選定についてのディスカッション	齊藤佳代	スタジオ、ギャラリー	7人
2019年	7月6日	土	10:30-16:30	基礎研修（対話による鑑賞とは、ディスクリプションワークショップ）	齊藤佳代	スタジオ、ギャラリー	13人
2019年	8月23日	金	10:30-16:00	ピヨンド展での作品選定についてディスカッション、Art Meets06作品でのグループワーク	齊藤佳代	スタジオ、ギャラリー	13人
2019年	8月24日	土	10:30-16:00	ピヨンド展作品でのナビゲーションの可能性の検討、グループワーク、コーチング	齊藤佳代	スタジオ、ギャラリー	11人
2019年	10月16日	水	10:30-16:00	表現の生態系展での作品選定、ナビゲーションの可能性の検討	齊藤佳代	スタジオ、ギャラリー	10人
2019年	11月16日	土	10:30-16:00	実践（ナビゲーションとコーチング）	齊藤佳代	スタジオ、ギャラリー	10人
2019年	11月23日	土	10:30-16:00	実践（ナビゲーションとコーチング）	齊藤佳代	スタジオ、ギャラリー	10人
2020年	2月14日	金	10:30-16:00	廣瀬智央展の作品紹介、面談	齊藤佳代	スタジオ、ギャラリー	7人
2020年	2月15日	土	10:30-16:00	鑑賞ワークショップ、意見交換、面談	齊藤佳代	スタジオ、ギャラリー	10人

(2) おしゃべりアートデイズ

年	日付	曜日	時間	展覧会	担当	会場	参加者数
2019年	6月3日	月	14:00-14:45	やなぎみわ 神話機械展	アーツナビゲーター	ギャラリー	7人
2019年	6月4日	火	14:00-14:45	やなぎみわ 神話機械展	アーツナビゲーター	ギャラリー	7人
2019年	6月6日	木	14:00-14:45	やなぎみわ 神話機械展	アーツナビゲーター	ギャラリー	6人
2019年	6月7日	金	14:00-14:45	やなぎみわ 神話機械展	アーツナビゲーター	ギャラリー	9人
2019年	6月8日	土	11:15-12:00	やなぎみわ 神話機械展	アーツナビゲーター	ギャラリー	6人
2019年	6月9日	日	11:15-12:00	やなぎみわ 神話機械展	アーツナビゲーター	ギャラリー	8人
2019年	9月2日	月	14:00-14:30	山本高之とアーツ前橋のピヨンド20XX 展	アーツナビゲーター	ギャラリー	5人
2019年	9月3日	火	14:00-14:30	山本高之とアーツ前橋のピヨンド20XX 展	アーツナビゲーター	ギャラリー	9人
2019年	9月5日	木	14:00-14:30	山本高之とアーツ前橋のピヨンド20XX 展	アーツナビゲーター	ギャラリー	8人
2019年	9月6日	金	14:00-14:30	山本高之とアーツ前橋のピヨンド20XX 展	アーツナビゲーター	ギャラリー	5人
2019年	9月7日	土	11:15-11:45	山本高之とアーツ前橋のピヨンド20XX 展	アーツナビゲーター	ギャラリー	5人
2019年	9月8日	日	11:15-11:45	山本高之とアーツ前橋のピヨンド20XX 展	アーツナビゲーター	ギャラリー	7人
2019年	12月2日	月	14:00-14:30	表現の生態系展	アーツナビゲーター	ギャラリー	5人
2019年	12月3日	火	14:00-14:30	表現の生態系展	アーツナビゲーター	ギャラリー	5人
2019年	12月5日	木	14:00-14:30	表現の生態系展	アーツナビゲーター	ギャラリー	5人

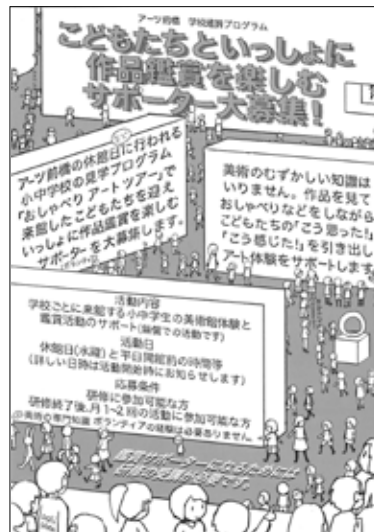
2019年	12月6日	金	14:00-14:30	表現の生態系展	アーツナビゲーター	ギャラリー	4人
2019年	12月7日	土	11:15-11:45	表現の生態系展	アーツナビゲーター	ギャラリー	8人
2019年	12月8日	日	11:15-11:45	表現の生態系展	アーツナビゲーター	ギャラリー	6人

(3) こどもアート探検

年	日付	曜日	時間	展覧会	担当	会場	参加者数
2019年	6月29日	土	13:00-16:00	身体と記憶	アーツナビゲーター	ギャラリー1、交流スペース	20人
2020年	2月16日	日	14:00-14:30	前橋の美術2020	アーツナビゲーター	ギャラリー1、交流スペース	30人

【資料】 イベントチラシ

平成25年
(2013年度)



平成26年
(2014年度)



平成27年
(2015年度)



平成28年
(2016年度)

こどもとアートのお会ひをつくる 鑑賞サポーター募集!!

アート鑑賞では、芸術鑑賞がはじまる子供達を支援する子どもたちとアート作品の出会いの時間をとりたい。毎年、アートのボランティアサポーターを募集・選抜しています。鑑賞の経験がなくても大丈夫。興味のある方が、お気軽に参加してください。一時的な活動を通して、アート作品と向き合い、こどもたちと向き合える機会が、これほどありません。そのための活動は、アート鑑賞を支援するだけでなく、アート作品の鑑賞を通して、こどもたちの成長を支援することもできます。

活動の目的 アート鑑賞を通して、こどもたちの成長を支援すること。

活動の場所 アート鑑賞の会場（アートセンター）

活動の時間 毎月第1、3、5日曜日 10:00～12:00

活動の人数 10名程度

活動の費用 活動費として、毎月10,000円程度を支払います。

活動の応募資格 18歳以上、日本国籍、日本語が話せること。

活動の応募方法 応募用紙をダウンロードし、お申し込みください。

活動の問い合わせ先 アーツ前橋事務局 028-252-1144

アーツナビゲーター募集要項

アーツナビゲーターとは、アート鑑賞の魅力を伝えるために、アート作品の鑑賞を通して、こどもたちの成長を支援するボランティアです。毎年、アーツナビゲーターを募集・選抜しています。鑑賞の経験がなくても大丈夫。興味のある方が、お気軽に参加してください。一時的な活動を通して、アート作品と向き合い、こどもたちと向き合える機会が、これほどありません。そのための活動は、アート鑑賞を支援するだけでなく、アート作品の鑑賞を通して、こどもたちの成長を支援することもできます。

活動の目的 アート鑑賞を通して、こどもたちの成長を支援すること。

活動の場所 アート鑑賞の会場（アートセンター）

活動の時間 毎月第1、3、5日曜日 10:00～12:00

活動の人数 10名程度

活動の費用 活動費として、毎月10,000円程度を支払います。

活動の応募資格 18歳以上、日本国籍、日本語が話せること。

活動の応募方法 応募用紙をダウンロードし、お申し込みください。

活動の問い合わせ先 アーツ前橋事務局 028-252-1144

平成29年
(2017年度)

アーツナビゲーター 大募集!

アーツナビゲーターとは、アート鑑賞の魅力を伝えるために、アート作品の鑑賞を通して、こどもたちの成長を支援するボランティアです。毎年、アーツナビゲーターを募集・選抜しています。鑑賞の経験がなくても大丈夫。興味のある方が、お気軽に参加してください。一時的な活動を通して、アート作品と向き合い、こどもたちと向き合える機会が、これほどありません。そのための活動は、アート鑑賞を支援するだけでなく、アート作品の鑑賞を通して、こどもたちの成長を支援することもできます。

活動の目的 アート鑑賞を通して、こどもたちの成長を支援すること。

活動の場所 アート鑑賞の会場（アートセンター）

活動の時間 毎月第1、3、5日曜日 10:00～12:00

活動の人数 10名程度

活動の費用 活動費として、毎月10,000円程度を支払います。

活動の応募資格 18歳以上、日本国籍、日本語が話せること。

活動の応募方法 応募用紙をダウンロードし、お申し込みください。

活動の問い合わせ先 アーツ前橋事務局 028-252-1144

アーツナビゲーター 募集要項

アーツナビゲーターとは、アート鑑賞の魅力を伝えるために、アート作品の鑑賞を通して、こどもたちの成長を支援するボランティアです。毎年、アーツナビゲーターを募集・選抜しています。鑑賞の経験がなくても大丈夫。興味のある方が、お気軽に参加してください。一時的な活動を通して、アート作品と向き合い、こどもたちと向き合える機会が、これほどありません。そのための活動は、アート鑑賞を支援するだけでなく、アート作品の鑑賞を通して、こどもたちの成長を支援することもできます。

活動の目的 アート鑑賞を通して、こどもたちの成長を支援すること。

活動の場所 アート鑑賞の会場（アートセンター）

活動の時間 毎月第1、3、5日曜日 10:00～12:00

活動の人数 10名程度

活動の費用 活動費として、毎月10,000円程度を支払います。

活動の応募資格 18歳以上、日本国籍、日本語が話せること。

活動の応募方法 応募用紙をダウンロードし、お申し込みください。

活動の問い合わせ先 アーツ前橋事務局 028-252-1144

平成30年
(2018年度)

アーツナビゲーター 大募集

アーツナビゲーターとは、アート鑑賞の魅力を伝えるために、アート作品の鑑賞を通して、こどもたちの成長を支援するボランティアです。毎年、アーツナビゲーターを募集・選抜しています。鑑賞の経験がなくても大丈夫。興味のある方が、お気軽に参加してください。一時的な活動を通して、アート作品と向き合い、こどもたちと向き合える機会が、これほどありません。そのための活動は、アート鑑賞を支援するだけでなく、アート作品の鑑賞を通して、こどもたちの成長を支援することもできます。

活動の目的 アート鑑賞を通して、こどもたちの成長を支援すること。

活動の場所 アート鑑賞の会場（アートセンター）

活動の時間 毎月第1、3、5日曜日 10:00～12:00

活動の人数 10名程度

活動の費用 活動費として、毎月10,000円程度を支払います。

活動の応募資格 18歳以上、日本国籍、日本語が話せること。

活動の応募方法 応募用紙をダウンロードし、お申し込みください。

活動の問い合わせ先 アーツ前橋事務局 028-252-1144

アーツナビゲーター募集要項

アーツナビゲーターとは、アート鑑賞の魅力を伝えるために、アート作品の鑑賞を通して、こどもたちの成長を支援するボランティアです。毎年、アーツナビゲーターを募集・選抜しています。鑑賞の経験がなくても大丈夫。興味のある方が、お気軽に参加してください。一時的な活動を通して、アート作品と向き合い、こどもたちと向き合える機会が、これほどありません。そのための活動は、アート鑑賞を支援するだけでなく、アート作品の鑑賞を通して、こどもたちの成長を支援することもできます。

活動の目的 アート鑑賞を通して、こどもたちの成長を支援すること。

活動の場所 アート鑑賞の会場（アートセンター）

活動の時間 毎月第1、3、5日曜日 10:00～12:00

活動の人数 10名程度

活動の費用 活動費として、毎月10,000円程度を支払います。

活動の応募資格 18歳以上、日本国籍、日本語が話せること。

活動の応募方法 応募用紙をダウンロードし、お申し込みください。

活動の問い合わせ先 アーツ前橋事務局 028-252-1144

平成31年
(2019年度)



表現の森 中島佑太×南橋団地 地域のうちとそとを行き来しながら深めるプログラム

今 井 朋

1 はじめに

2016年の夏の会期に開催された企画展「表現の森 協働としてのアート」をきっかけに、現在まで5つのプロジェクトを継続している⁽¹⁾。アーティストと前橋市内のNPOや施設が協働し、福祉や医療、教育が抱えている社会課題に対してアーティストや美術館ができることはなにかを考えるために始めた。また、美術の専門家や非専門家が共に活動することで、「美術」よりも表現することそのものの役割を改めて見つめなおすプロジェクトでもある⁽²⁾。これまでの4年間の活動では、それぞれのプロジェクトごとに進み方も異なる。

多くの公立美術館がその公共性を担保するために「より多くの対象者」に「より多様な」プログラムを提供することを目的に教育普及などの事業が行われるのに対し、本プロジェクトの特徴は限られた特定の人々に時間をかけて繰り返しプログラムを提供することで、これらの特定の参加者と共に考え、彼らが主体的に表現できる場を設定していくことを目的にしている。プログラムが行われる場は、どちらかというところ閉じられた空間であるため、事業の報告を特設サイト (<https://www.artsmaebashi.jp/FoE/>) で公開することで、プロジェクトに直接的に関わりの無い外部の人たちからの意見なども取り入れられるような仕組み作りもしている。

本論考では、5つのプロジェクトのうちの中島佑太と南橋団地での活動を取り上げる。この4年間で実際にどんなプログラムが行われたのか、また活動を継続することによって見えてきた課題や目的はなにかを考えたい。最初から最後まで決められた固定的なプログラムでなく、参加する一人一人の発言や反応に即興的に答え

ながらプログラムを組み立て直してきたため、内部で行われていることが見えにくいプロジェクトでもある。この活動のわかりにくさや構造の複雑さが、この活動に大きな意義を与えていることもわかってきた。ここでもう一度、活動を振り返ることで、このプロジェクトの設計の仕方を改めて考えたい。

2 2016年 南橋団地でプロジェクトを始める

「表現の森」を始める際に、まずは5組のアーティストの選定から始めた。中島佑太は、前橋出身で、現在も前橋を拠点に活動を行っており、アーツ前橋の開館以前に行われていたプレイベントを通じても美術館と既に深い関わりがあった⁽³⁾。中島は、アーツ前橋から徒歩圏内にある清心幼稚園で、日常的にアーティストとして子どもたちの生活空間に入り込む活動をしている。園の中に先生でも親でもない大人がいることの意味を保育者とともに考え、表現を通じて子どもたちの考えを肯定し続けることで、彼らの人間関係を観察したり、子どもの発想力や思考力を基礎とした活動を生み出すことを積極的に行っていた。

中島のアーティストとしての活動は、「わかりにくい」とよく言われる。確かに、美術という枠組みで彼の活動を語ろうとすると形が見えにくく、そもそも物質としての作品は存在しないに等しい。活動に参加している当事者以外の人間には何が行われているのかが、よく理解できない。皆で一緒に造形物を作ることや、美術にまつわる何かしらの技術を学ぶというようなわかりやすい成果を求めるプログラムではなく、中島が自身のプログラムを通じて作り出すのは創造力や発想力を支えるためのコミュニ

ケーションや人間関係である。

「表現の森」のプログラムの特徴は、時間をかけてプロジェクトを行なうことで、そこで現れる変化を観察しながら、次のプログラムに結び付けることができるという点だ。中島も、その他の若手アーティストと同様、アーティスト・イン・レジデンスやアーティスト・イン・スクールなどの事業のためにさまざまな地方に招かれて一定期間滞在する機会が多いが、アーティストの多くはその後、去らなければならない存在である。地域住民となんらかの関係を紡ぐことができても、そこから先はアーティストの残したものがどのように地域の中で発展していくのか、また、活用されるのか、時には消滅していくのかはその住民次第となることへのものかしさはアーティストに常に付きまといっているはずだ。その意味で、前橋は、中島のホームであるという強みが活かせないだろうかと考えた。

中島とプロジェクトを立ち上げることを決めてから、どのような場所で、どのような対象者が良いのかを考えた。「表現の森」の他の4つのプロジェクトは、母子生活支援施設、引きこもりや不登校の経験のある若者たちが通うフリースペース、旧難民定住センター、高齢者施設というようにその場所にアプローチすることで、対象者の社会的属性が既に限定されるような団体だ。中島には、地元で活動をしていることを生かし、リサーチを通じてさまざまな社会的属性や社会課題を複雑に抱えている場所を選択するのが良いのではないかと思った。紆余曲折はあったものの、最終的に、中島自身も5歳までの幼少期を過ごした南橋団地が対象となった。南橋団地は、アーツ前橋が位置する前橋中心市街地の北側にあり、市内でも二番目に大きな公営団地で約650世帯が居住している。団地という選択は対象が限定されないがゆえの難しさもあるが、その後のプログラムの設計においては自由度を与えてくれたように思う。

団地の特性を知るためにまずは、団地を歩い

て観察し、その地域がどんな建物や土地で構成されているのかを知ることから始めた。また、当時の民生委員だった方にもお話を聞き、団地の現状や抱える課題についても知ることができた。南橋町は、団地のみからなる町で、この町には商店などはないため基本的に住民のみで構成される町であることがわかった。また、戸建地区と団地地区とに分かれているが、公営の団地地区に住むためには所得制限もあるため低所得者が自然と集まりやすい環境であることも判明した。公営の団地地区には、県営と市営が混在しているが、どちらにも独居高齢者が多い。南橋団地は、日本の高度経済成長期の団地の変遷の特徴を顕著に表している。元々は長屋形式の住居⁽⁴⁾がほとんどだったが、人口増加にともない建物は次々に高層化していった。庭を隔ててのお隣さんは、マンションの扉を隔てることで、コミュニケーションが希薄になっていったのではないかと。住居の効率化に伴って失われた人間関係は確実にこの南橋団地にも存在しているように感じる。民生委員の方へのヒアリングによれば、シングルマザー家庭の全世帯に占める割合は10%程度で、独居高齢者も100人弱にのぼるという。もともと、私たちが南橋団地に関心を抱いた理由も、この地域には外国籍の子どもが多いという噂を聞いたからだったが、民生委員の方によればフィリピン系のシングルマザーの家庭が多いとのことだった。その後、南橋団地に通うようになってから思うのは、確かに外国籍の家庭に出会うことはあるが、他の地域に比べて多いという印象は薄い。団地にいる外国籍の方は、確かにシングルマザーで子どもが多いという特徴はあるが、そのような社会的条件ゆえにいわゆる「日本のスタンダード」な家庭とは異なるため、目に付くというだけのことのように感じる。

2016年の「表現の森」の展示では、こうした団地の内と外を行き来することで見えてくる視点を大切にしたい。団地には、住民しか住んでいないという当然の事実が、この団地でプロジェ

クトを行おうとしている中島や私たちスタッフにとっては、最初の大きなハードルになった。これまでの活動は、「表現の森」の特設サイトに中島自身の言葉で綴られている。その中で中島は以下のように書いている。「（表現の森の団地のプロジェクトでは）社会的には善いことをしていると思うのだけど、どこか悪いことをしているような気持ちになることがある。学校帰りの小学生に不用意に声をかけて通報された話を聞いたりすると、いつそれが自分の番かとビクビクしてしまうのはなぜなのか⁽⁵⁾。」子どもたちは、学校で知らない大人に話しかけられても、付いていかないようにと日々、教育されている。プロジェクトを始めた当時は団地内の子どもたちの多くにとっては、私たちは見知らぬ大人以外のなにものでもなかった。団地は、基本的に居住空間のみで構成されていることから、プライベート／パブリックという境界が建物の外にも広がっているのだ。団地の内部に入った瞬間に、外部の人間はある種のプライベート空間に足を踏み込んだような感覚に陥るという団地の特徴を最初のプロジェクトの考えの基礎とすることにした。

3 プロジェクト名はLDKツーリスト

「すぐ見える位置、すぐ探せる位置に人の生活がある。しかし、そのプライベートな範囲は当然区切られている。団地という境界線の中に、パブリックとプライベートの境界線がある。その中にどんな暮らしがあるのか、その暮らしからはどのような日本社会が見えるのだろうか。そしてそれはどうやったら見えるのだろうか⁽⁶⁾。」

「思えば自分は人見知りだ。それにも関わらず人との密な関係を望んでいる。ワークショップは、そう言った自分と社会との接点をつくりだすための、もしくはそういう自分の望みを表現する手法だったのかもしれない。時代の変化とともに目まぐるしく変わっていく郊外の風景

のように、家族のあり方も変わっていく。その移り変わりをリビングルームから捉えてみたい。そのためにはどのようなプロセスが可能なのか⁽⁷⁾。」

中島が活動記録に残した言葉が、その後私たちが団地内で行うプロジェクトの根幹にある視点になっていく。団地や団地の子ども達が行く学校の内と外、また美術館と団地などの日常に隠れている「旅」をプロジェクトのテーマとして決めた。また、物理的な移動だけではなく、精神的な移動も含めて考えることで日常的な視点から少しずれた視点を得るような活動になるような旅を提案する旅行会社をイメージして、プロジェクト名を「LDKツーリスト」と名付けた (fig.1)。「LDK」というのは、団地の間取りのリビング、ダイニング、キッチンを通じて社会を眺めてみようという意味を込めている。現在



fig.1 「表現の森 協働としてのアート」展の中でのLDKツーリストの展示の様子

までこの「LDKツーリスト」という考え方は変わらず、参加する人たちの発想や視点を取り入れながら、日常の中を旅するようなワークショッププログラムを組み立てている。2016年からの3年間は、中島や私たち主催者側で設計した旅のプランに子どもたちや住民が参加する形式を取っていたが、2019年にはプロジェクトにコアに参加する団地の子どもたちと一緒に旅のプランを考えるとところまできた。旅の立案者が私たちから子どもたちに変化したことは、4年間と

いう関係性の構築の上に生まれた新たなステップだった。このことは、最終章で改めて書き進めたい。

「旅」には大きく分けて2種類の旅があるだろう。一つは目的地を定めてそこにたどり着く最短距離を探し目的地にたどり着くもの、もう一つは目的地を特に見定めず途中の過程で起こる出来事や思考を元に漂流していくような旅だ。LDKツーリストは、どちらかというと後者を活動の主軸に置いている。中島は、「漂流していくこと、その過程で未知と遭遇しながら遊べたらいいなと思っています。目的地にまっしぐらに向かうあまり、大事なものを見落とすのは避けたいです⁽⁸⁾。」と関連シンポジウムのなかで述べている。この活動の目的は、参加者たちとの長期的な関係性の構築や彼らがワークショップを通じて何を考え、その先にどんなことをしたいと思っているのかを実際のプログラムに組み込むことだ。私たちのプログラムの設計は、わかりにくいかもしれないが、そのわかりにくさは外枠を設計しているだけで、詳細の設計は参加者とともに行うための余白を十分に残しておきたいと考えているからだ。ワークショップのなかで、参加者の声や発想を拾い集め、次のワークショップのための素材とする。そこからどこへ辿り着けるかは未知数だが、参加者は美術館やアーティストによるワークショップという公共サービスを享受するだけの存在から、そのプログラム自体を作る存在へと次第に立場が変化していく。

4 たった一人のワークショップ参加者

2016年は、主に南橋団地にある集会室を拠点にしながら、団地住民を対象にしたワークショップを計6回行った。また、「表現の森協働としてのアート」展の関連イベントとして美術館の来館者を対象にした団地へのツアーを2回開催し、年度末には年度内に開催したプログラムを南橋団地に隣接する南橋公民館（団地に隣接はしているが、公民館自体は団地の外に

位置する）で展示し（fig. 2）、プログラムに直接的に参加していない住民たちにもプロジェクトを知ってもらえる機会を設けた。



fig.2 南橋公民館での「LDKツーリスト」報告展

2016年に団地の集会室で行ったワークショップは、回を重ねながら、テーマをそのつど設定し直し、ワークショップの開催目的もアーティストや参加するスタッフと明確化していったつもりだったが、美術館で一般的に行うワークショップが、ホームページやチラシにより広く告知され関心の高い人々にアクセスできるのに対して、団地住民に限定することで対象者を見定めることがとても困難であることに気がついた。

民生委員などの地域の核になっている人たちから情報を広めてもらうほかに、団地の全家庭のポストへプログラム告知のためのチラシを投函したが、ポスティングされる他の多くのチラシと同様に扱われ、配布する労力に比べて成果が出にくいこともわかってきた。第1回のワークショップの「雲をつかむ」は、美術館が行うワークショップという目新しさか、多くの参加者が年齢の幅を問わず集まったが、そこから回を重ねるごとに参加者が減っていった。

最も決定的だったのが、3回目に行った「ひみつのさんぽかいぎ」で、ワークショップ開始時の参加者は1人だった。主催者としては、プログラムをアーティストに依頼しておきながら、まったく集客できないという反省しかないが、この難しい状況で中島は、自身がこのワー

クショップで行おうとしていた内容を一旦、保留にして、自分の目の前にいる参加者のSさんがこの日、何をしたいと思ってこのワークショップに足を運んだのかを聞き始めた (fig.3)。このワークショップで、起きたことはその後の私



fig.3 ワークショップ「ひみつのさんぽかいぎ」

たちの活動の大切な態度を決定づけた。美術館という公的な機関で行われるプログラムの多くは、不特定多数の人々に向けて、美術館やアーティストが良いと思うプログラムを提供することが目的とされるが、このプロジェクトでは、不特定多数という対象者へ向けてプログラムを設計しても意味がないということだ。

「表現の森」のキーアイデアは、目の前の相手に表現をしたいと思うことで、自分とは異なる他者との関係性が生まれるという、社会の中で生きていくうえでは最も基礎的なことだ。日常的な「表現」は、伝えたいと思う相手がいるからこそ、その相手に伝わるように自分の想いが何らかの物質に還元されることが重要であるはずだ。「表現の森」が、参加者数という量的要素ではなく、限られた参加者による深い理解というものを目的にしているのは、こうしたアーティストとの経験によるところが大きい。

「ひみつのさんぽかいぎ」では、結局、Sさんの発案により、集会室の外に出かけるための靴を作ろうということになり、参加するスタッフも一緒に、もってきた紙やテープや縄を利用して、靴づくりを始めた (fig.4)。各自が作った靴を履いて、そのまま団地の中を散歩し始める



fig.4 ワークショップ「ひみつのさんぽかいぎ」

と、団地内の公園で遊んでいたSさんの同級生などがワークショップに参加し始めた。最終的には、6名の子どもたちが参加したのだが、ここで改めて気づいたのは、団地の中には既にコミュニティが存在していることに私たちは無自覚でありすぎたのではないかということだ。私たちが初めて団地に入った時に、部外者としての内部の視線を気にしたように、団地の中には既にさまざまな人々の繋がりが存在している。その繋がりの輪の中に、少し仲間入りさせてもらうことからしか、私たちはプロジェクトを行うことはできない。「表現の森」を始める時に、美術館が福祉や教育のような異なる分野に入り込むことを考えていた。当然のことではあるが、ここで大切なのは、私たちがプロジェクトを行いたいと思っている対象団体に既に存在している関係性を観察し、対象者の人々の考えを聞きながらプログラムを設計しなければ、いつまでもたっても独りよがりなプログラムにしかないということだ。

中島が、これまで地域の幼稚園と連携して活動をしていたり、子どもの発想力や子どもの権利からプログラムを考えることで、社会そのもののルールや常識を疑うということをワークショップという手法を用いて行ってきたことから、団地のプログラムにおいても子どもという視点が重要になってきた。ただ、子どもの発想力を手放しに評価するというのではなく、子どもの視点を通じて、その子どもたちの周囲にいる大人の視点とどのように異なっていて、どの

ように共通しているのかを考えていこうというのが、私たちの活動の目的になっていった。また、子どもたちの視点から、団地の大人たちを観察することができるかもしれないと感じ始めたのだ。

5 地域の子どもたちに出会うには アーティスト・イン・スクール

2016年は、主に団地内でプログラム参加者を募ってきたが、その中で感じた難しさは、もしもプログラムが子どもを対象にしたものである場合に、保護者やその周囲の大人が、活動に理解や関心を示さないことには、子どもの参加は可能にならないのではないかとということだった。ワークショップに来てみたいと思う子どもを増やし、子どもが自分で考えて参加できるようにするには、私たちが直接的に子どもたちに何が行われているのかを伝えられるような関係性を築き、情報を直接渡せる手段がないと難しい。その場合、団地内だけの活動では、作れる関係性も限られてしまうため、2017年からは、南橋団地の校区である桃川小学校にアーティスト・イン・スクール（以下、AISと省略）の枠内で中島を派遣することにした。ただ、アーツ前橋が、AISを前橋市内の学校を対象に始めたのも2016年であったため、このプログラム自体、市内でもまだ認知されていなかった。桃川小学校の当時の校長先生にプログラムを打診した際も、アーツ前橋という施設の名前は知っていても、AISがどのようなプログラムでどのように展開するのも想像するのが難しかったようだ。アーツ前橋が行っているその他のAISでは、教育委員会からプログラムを受け入れてくれそうな先生を紹介してもらい打診するか、学校から希望が出された場合にプログラムを行っていたことを考えると、桃川小学校のように他のプロジェクト経由で特に学校からの希望がないにも関わらず、こちらから開催を依頼するのは非常に稀な例であった⁽⁹⁾。ただ、AISをパイロット事業として始める以前から意見交換をしていた

群馬大学の茂木教授や教育委員会の担当者が、桃川小学校に対していかにアーティストの活動が学校の子どもたちの経験にとって有意義なものであるのかを、校長先生はじめ、現場の先生に向けて丁寧に説得をしてくださった。また、中島自身が、アーティストの活動として他県でもAISの経験が豊富であった⁽¹⁰⁾ことが、この活動をはじめる上で先生方の理解をえるために大切だった。

最初は、中島も他県で実践しているようなプログラム内容を想定していた。中島の言葉を引用すれば、「子どもと遊ぶ、一緒に作るという分かりやすい‘関わり方’もあるが、例えば空き教室でアーティストが滞在制作をしていて、それを子どもが休み時間に覗きにきてちょっと作品が変わったとを感じるような一見分かりづらい‘関わり方’もあると思う。その辺りを学校へ説明し、伝えていく努力が必要。いわゆる分かりやすい‘関わり’を求めると続かなくなると思う⁽¹¹⁾」という空き教室を利用するようなプログラムも提案したが、桃川小学校に空き教室として使用できる部屋がないことや初めてのプログラムでどのように生徒たちが反応するのかが予測不可能であることが教員たちの懸念点としてあったため、初年度は、図画工作授業の補助教員として関わることになった。アーティストが単に図画工作で習得する技術の補助的な役割として学校の授業に参加することはAISプログラムにおいては、稀だ。また、アーティストが本来持っている特性を生かし切れていないプログラムなのではないかという意見もあったが、長期的なプランで学校と関わることを前提として考えていたため、学校のシステムの中に入り込める方法でアプローチすることが最も大切なことだと思った。学校は、社会における基礎的な制度である。この制度においては、先生と生徒という関係性が完全に構築されている。この関係性の中に、いかにアートやアーティストという要素が入り込むことで子どもたちの表情が変化していくのかをまずは学校の先生に感じて

もらう機会を持たなければ、プログラムを始めることすらできない。また、私たち自身がこれから関係をもつであろう学校の現場を動かしている人がどんな先生たちなのか、生徒はどんな様子なのか、保護者と先生たちはどんな関係なのかという既に存在している人の輪や現場の雰囲気を理解するうえで、補助教員として中島が関わることは大切だったように思う。結局、AISの1年目には、中島は43日間学校に通った。授業の様子を見ていても、補助「教員」という立場というよりも、他の生徒よりも少し図工が得意な大人の転校生という雰囲気だった。

その後、2018年、2019年とAISを桃川小学校で継続している。2018年は、前年度と同様に補助教員という形がかかわったが、2019年度には、補助教員として関わる授業と主教員として授業を行う両方のプログラムへ変化した。3年目に入る時、中島が主教員として授業を組み立てる形がかかわってもらえないかという提案が学校側からあったことは、複数年度で関係性を築いてきた中での大きなステップだった。特に「現代アート」というわかりにくい活動を学校の中に持ち込むとき、もともと多忙な学校現場において、その授業の効果よりも先生への負担が大きくなってしまいうこともありえるからだ⁽¹²⁾。中島自身は、補助教員としての自分の立ち位置のようなものを理解していたところだったので、嬉しい反面、少し戸惑いもあったようだった。ただ、補助教員としてアーティストを派遣し続けることにも美術館として難しさを感じていたのも、こうした学校からの提案や声に反応する形でプログラムを設計していける校長先生を始めとする先生方の受け入れ態勢が整いつつあるのは、今後のプログラムを考えていくうえでも重要なことだ。桃川小のAISでは、長く一つの学校と関わることで、今後、どんな変化が子どもたちに生まれるのかはもちろん、先生たちと共に実現できることが何かを現場を観察しながら考えていきたいと思う。

2017年にAISを通じて、子どもたちと直接的

なコミュニケーションが取れるようになったことで、南橘団地のワークショップに来ることの難しい環境の子どもたちにも出会うことができた。学校と彼らの家庭のある地区をプログラムを通じて行き来することで、出会える子どもたちの数が格段に増えた。AISを始めて以降、南橘団地で行うワークショップには、学校を通じて告知のチラシを子どもたちに手渡すことで、プログラムに関心を示したり、学校での中島との関係を深めたいと感じた子どもたちは、お友達の家遊びに行くような感覚でワークショップ会場に来てくれるようになった。

また、2018年には、南橘町の子ども育成会との連携プログラムを始めた。たまたま、初回から常連であった子どもたちのお父さんが会長になったことをきっかけに、育成会から声をかけていただいた。夏祭りやクリスマス会のような育成会が年間を通して行っている行事を中島のワークショップという形で子どもたちと共にすることで、従来行われている活動が僅かに異なる活動になる。それは同時に、団地の中で既に行われている活動と美術館が行っている活動には小さな差異はあっても、まったく異なる活動ではなく、彼らの日常と繋がっているものであることを感じてもらえたのではないだろうか。

6 ワークショップ「美術館ってなに？」から考える

2019年には、アーツ前橋で開催される夏の企画展に連動させる形で、南橘団地の子どもたちと新たな活動を行った。2019年の2月に南橘団地で行った「題名のないワークショップ」の中で、参加した子どもがDVD屋さんごっこを始めた。中島がたまたま、使用しなくなったDVDをワークショップの素材として持参したことがきっかけで、彼らなりにおもしろいだろうと思うタイトルをDVDに付けて、お店を始めたのだ。子どもたちから発案されたタイトルの中に、「ワークショップってなに？」と題されたものがあつた (fig.5)。このタイトルを付けたのは、



fig.5 ワークショップ「題名のないワークショップ」子どもたちが始めたDVD屋

ワークショップに常連で参加していた子どもたちだったが、学校や日常生活の中では聞きなれない「ワークショップ」という言葉に対して、彼らなりに疑問をもったのだろう。私も中島も美術関係者にはよくあることだが、きちんと定義することなくこの「ワークショップ」という言葉を自分たちの活動を説明する時に使っていた。中島のワークショップは、「ここは、海です。」や「旅のはじまりです。」というような謎めいたタイトルだけが掲げられるがゆえ、子どもたちはどちらかというと特に制限もなく素材と遊び始める。ワークショップをする時に、私たちが注意を払うのは、素材を過剰に与えすぎないこと、団地の中に自分たちで素材を見つけに行くこと、誰かが面白い発想があれば、それが社会的なルールを逸脱しないぎりぎりのところまで表現させつづけることで、発想の連鎖を生み出すようにしていることくらいだ。それは単に自由なワークショップということではなく、そこでの課題を中島は以下のように的確に説明している。

「定例のワークショップなので、レギュラー参加の子が何人か現れ始めています。この前、その子たちに「なかじ（中島の愛称）のワークショップは、好き勝手できるから好きなんだ」といわれました。それはある種の褒め言葉ですが、少し違和感がありました。もちろん子どもたちの自由な表現を生かしたいと思ってはいま

す。ただし「好き勝手」ではなく、自由を得るためにどういうコミュニケーションや交渉、対話が必要なのかを伝えること、それが二つ目の課題です⁽¹³⁾。」

子どもたちの中には、学校の図工の授業とは異なり自由にできる南橋団地のワークショップが好きだという子もいる。「ワークショップ」という言葉の意味自体を理解しているわけではないが、プログラムを定期的で開催することで彼らなりの理解が、この「自由」という言葉と連想するかたちで進んでいるのではないかな。

この「ワークショップってなに？」という子どもたちの作品から、この夏は新たなワークショップ「美術館ってなに？」というプログラムを行うことにした。美術館を考えながら、普段彼らが参加しているワークショップが何なのかを子どもたちに考えてもらうということを目的にするものだ。これまで南橋団地のワークショップに複数回参加してくれた子どもたちに手紙形式の招待状を渡し、その中から5名が参加を表明してくれた。5名のうちの4名は2016年のプロジェクト開始のころからコアに関わってくれている子どもたちで、この4年間私たちも成長を見続けてきた。

プログラム自体は、美術館のバックヤード（展覧会が行われていない展示室、搬入のためのエレベーター、収蔵庫の一部）を子どもたちとツアーし、美術館という場所がどんな場所なのかを知ってもらった上で、学芸員が企画展を作る時に行うような、収蔵作品の中から展示したい作品を選ぶというところまでしてもらった。膨大な収蔵作品の中から、子どもたちが最初に選んだ作品は田村清男の《桃木川冬景》（fig.6）だった。彼らが通う桃川小学校の裏に流れている川を描いた作品だったので、見慣れた名前に子どもたちは魅かれたのかもしれない。ただ、全員の意見が一致したわけではなかったもので、改めて「みんなが不幸になる絵画の選択」をお題に収蔵作品を選び直すことにし



fig.6 田村清男《桃木川冬景》アーツ前橋蔵

た。彼らは世の中の色々な「不幸」を想像しながら、収蔵作品を眺めた。結果、彼らを選んだ作品は近藤嘉男の《足尾風景》(fig.7)という作品だった。1950年に描かれたこの作品には、公



fig.7 近藤嘉男《足尾風景》1950年 アーツ前橋蔵

害が発生した足尾銅山周辺を取材して描かれた建物や工場が描写されている。今回参加した子どもたちの半分は足尾鉍毒事件のことをなんとなく知っているようだったが、「こういう風景にならないように作家は作品を描いたのではないか」というような意見もでた。最終的にこの作品が2019年の夏の企画展で南橘団地の子どもたちに選ばれた作品として展示室に展示された(fig.8)。

ワークショップが終わった後に、子どもたちにインタビューをすると、「ワークショップはみえないものがみえるようになる」と答えた子ど



fig.8 「山本高之とアーツ前橋のビヨンド20XX」展におけるLDKツーリストプロジェクト展示風景

もがいた(fig.9)。近藤の作品もその一例にあたるが、美術作品の役割には社会の中で潜在的に見えなくなっているものを可視化するというも



fig.9 ワークショップ「美術館ってなに？」参加メンバーへのインタビューの様子

のがある。私たちの日常的な視点だけでは見えなくなっている「もの」や「こと」や「ひと」にアーティストの作品を通じて気づかされることはよくある。社会課題を取り扱う作品やプロジェクトの場合はその特徴がより顕著に見える。こうした、美術の役割を4年間繰り返し行われた活動を通じて子どもたちは少しずつ学校で教えてもらう視点とはまたずれた視点を得る機会になったのかもしれない。

ただ、最後に触れておくが、4年間私たちは南橘団地の子どもたちと主にプログラムを組み立ててきた、それはこうした地域と共働するプロジェクトにありがちな「彼らにとって良いもの」を前提にし過ぎてはいないだろうかとも感

じている。美術批評家の福住廉が鳥取藝術祭での中島のプロジェクトレビューにおいて以下のように述べている。

「一般論で言えば、市民や子どもを対象としたワークショップや交流型の作品は性善説に基づいていることが多い。観客参加型のアートであろうと、リレーショナル・アートであろうと、アートによって彼らとの関係性を一時的とはいえ構築することは、彼らにとってもよきものに違いないという揺るぎない確信を、それらの基底に隠している。それゆえ積極的に彼らに心を開き、そのことで彼らの心を開放することは、ほぼ無条件に是認される。裏返していえば、それらのアートが彼らにとって迷惑かつ不愉快極まりないものになりうる潜在的な可能性はあらかじめ抑圧されているわけだ⁽¹⁴⁾。」

南橋団地の活動を始めた頃は、福住の言及するような「迷惑かつ不愉快極まりない」ものと捉えられることもあったかもしれないが、対象を子どもたちに絞り、彼らが既に所属している育成会や学校のような集団にカモフラージュしながら入り込む方法を私たちは選択した。それは同時に、アートとは何かを問うことを一旦、保留にしている状態でもある。今後の課題は、私たちがここで活動を継続することを優先するがゆえに、こうして保留にされてきた課題を改めて見つめ直していくことかもしれない。

7 さいごに

「表現の森」を始めて4年が経過した。この時間の中で育まれた色々な個人との関係性は美術館にとってなによりも大切なものだ。今回の南橋団地の子どもたちの事例も、時間をかけてプログラムを行ったことによる深い体験として彼らのこれからの人生にとって一つの視点を与えるものになるのではないか。「表現の森」の他のプロジェクトにも言えることだが、特にこの南橋団地の活動に関しては、プログラムを設

計するうえでの「ゆるやかさ」を大切にしている。最初の旅のイメージでも書いた通り、どこか目的地があり、そこまでの最短距離を考えてプログラムを設計するのではなく、参加した人々と共に漂流し、考えを出し合いながら旅の目的は何か、果たして目的地のようなものがあるのかを一緒に設計していくというイメージだ。この「ゆるやかさの設計」は、その場で起きていることを観察し、子どもたちが考えたこと、思ったこと、言葉にしたことをプログラムに取り入れることで、次のプログラムが設定される秘訣でもある。

こうした関係が可能なのも、4年間という長い時間をかけて南橋団地／桃川小学校という一つの地域と交流をしてきた結果ではないか。このプロジェクトを通じて作品として生まれ出ているのは、子どもたちにとっての「アート」や「美術館」というものへの疑問や私たちが彼らの発想から得る一連のワークショップではないだろうか。私たちはまだまだ彼らと旅を続けようと思っている。今度は、彼らが選んだ足尾がどんな場所なのかを子どもたちと見に行き、子どもたちがツアーコンダクターになり足尾ツアーのプログラムを作る予定だ。

-
- (1) 2016年から現在までの活動は、「表現の森」特設サイトにプロジェクトごとに記録されている。特設サイト：<https://www.artsmaebashi.jp/FoE/>
 - (2) 初年度と2年目の活動に関しては、以下の論考を参照のこと。今井朋「『表現の森』の始まりと2年目の活動を通じて考えたこと」『アーツ前橋 平成29年度 研究紀要』11頁-18頁
 - (3) アーツ前橋が、2013年に美術館として開館する以前に行っていたプレイベントや2015年に群馬大学と協働し開催した、アートプロジェクトを担える人材育成講座の講師として関わってもらった。
 - (4) 2016年のプロジェクト開始時には長屋形式の団地内で最も古い建物が残り、9世帯の主に高齢者が暮らしていたが、2018年には取り壊された。
 - (5) 中島佑太「チラシポスティング01」表現の森特設サイト：<https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/nankitsu-posting01/>
 - (6) 同上

- (7) 中島佑太「チラシポスティング02」表現の森特設サイト：<https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/nankitsu-posting/>
- (8) 【関連シンポジウム：記録】トークセッション④「表現の先に見る社会」
<https://www.artsmaebashi.jp/FoE/voice> 【関連シンポジウム：記録】
- (9) 小田久美子「アーティスト・イン・スクール 教科のあいだに広がる想像力」『アーツ前橋 平成29年度研究紀要』2018年 アーツ前橋
- (10) 中島は、2013年にはアーカススタジオの招へいにより守谷市の小学校に滞在した。また、2018年には札幌市内の小学校でのAISプログラムも行っている。一般社団法人AISプランニング『Artist In School アーティストと考える学校の未来 おとどけアート2018記録集』2018年
- (11) 小田久美子 前掲書 20頁
- (12) 梶原千恵「【中島佑太×南橋団地】‘地域に開かれた教育課程’とは何か AISコーディネーターの視点から」表現の森特設サイト：<https://www.artsmaebashi.jp/FoE/voice/kajiwara/>
- (13) 【関連シンポジウム：記録】トークセッション④「表現の先に見る社会」
<https://www.artsmaebashi.jp/FoE/voice> 【関連シンポジウム：記録】
- (14) 福住廉「鳥取藝術祭2014」『artscapeレビュー』2014年10月18日 https://artscape.jp/report/review/10105154_1735.html

付属資料【表現の森】中島佑太×南橋団地 LDKツーリスト活動一覧

2016年度

No.	日付	時間	内容	主催者	会場	参加者数	報告記事リンク
1	2016/5/8	13:00～17:00	ワークショップ 雲をつかむ	アーツ前橋	南橋団地第2集会室	48人	https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/nankitsu-first-ws/
2	2016/5/24	15:00～16:30	ワークショップ フラッグガーランドランド	アーツ前橋	南橋団地	22人	https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/nankitsu-ws-flag/
3	2016/6/25	13:00～15:00	ワークショップ ひみつのさんぽかいぎ	アーツ前橋	南橋団地第2集会室	12人	https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/nankitsu-workshop/
4	2016/7/2	13:00～15:00	ワークショップ 旅するお料理図鑑	アーツ前橋	南橋団地第2集会室	29人	https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/nankitsu-ws-cookbook/
5	2016/7/30	15:00～21:00	南橋団地納涼大会 ワークショップ	南橋町自治会	南橋団地	106人	https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/nankitsu-summerfest2016/
6	2016/8/6	13:00～16:00	表現の森展関連イベント 常夏ワークショップ	アーツ前橋	アーツ前橋	32人	
7	2016/8/7	15:00～18:00	表現の森展関連イベント LDKツーリストで行く常夏を嗅ぐ旅ツアー	アーツ前橋	南橋公民館・ 南橋団地	22人	
8	2016/9/10	13:00～16:00	表現の森展関連イベント 常夏ワークショップ	アーツ前橋	アーツ前橋	54人	
9	2016/8/21	15:00～18:00	表現の森展関連イベント LDKツーリストで行く常夏を嗅ぐ旅ツアー	アーツ前橋	南橋公民館・ 南橋団地	19人	
10	2016/11/15～ 11/29		LDKツーリスト報告展	アーツ前橋	南橋公民館		
11	2016/11/19	13:00～15:00	ワークショップ モウソウジ	アーツ前橋	南橋公民館	17人	https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/nankitsu-mousouji/

2017年度

No.	日付	時間	内容	主催者	会場	参加者数	報告記事リンク
12	2017/10/2 ～2018/3/14		アーティスト・イン・スクール (3～6年生) 図画工作授業補助教員	アーツ前橋 桃川小学校	桃川小学校		https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/artist-in-school-momokawa01/ https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/artist-in-school-momokawa02/ https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/artist-in-school-momokawa03/ https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/artist-in-school-momokawa04/ https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/artist-in-school-momokawa05/ https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/artist-in-school-momokawa06/ https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/artist-in-school-momokawa07/ https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/artist-in-school-momokawa08/ https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/artist-in-school-momokawa09/ https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/artist-in-school-momokawa10/
13	2018/1/16	13:00～15:00	南橋団地生き生きサロン ワークショップ	南橋町自治会	南橋団地第2集会室	30人	https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/nankitsu-ws-salon/
14	2018/2/4	13:30～16:00	ワークショップ こは、海です。	アーツ前橋	南橋公民館	46人	https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/nankitsu-ws-unidesu/
15	2018/2/11	13:30～16:00	ワークショップ こは、海です。	アーツ前橋	南橋公民館	39人	
16	2018/3/11	13:30～16:00	ワークショップ 旅のはじまりです。	アーツ前橋	南橋公民館	42人	https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/nankitsu-ws-hajimaridesu/
17	2018/3/25	13:30～16:00	ワークショップ 旅のはじまりです。	アーツ前橋	南橋公民館	45人	

2018年度

No.	日付	時間	内容	主催者	会場	参加者数	報告記事リンク
18	2018/7/28	13:00～17:00	ワークショップ おまつり工場	アーツ前橋 南橋町自治会	南橋団地	70人	
19	2018/8/18	10:00～16:30	アーツ前橋バスツアー	アーツ前橋 南橋町子ども育成会	南橋団地 アーツ前橋	31人	
20	2018/10/10 ～2019/2/25		アーティスト・イン・スクール (4年3組、5年生全学級) 図画工作授業補助教員	アーツ前橋 桃川小学校	桃川小学校		https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/artist-in-school-momokawa11/ https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/artist-in-school-momokawa12/ https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/artist-in-school-momokawa13/ https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/artist-in-school-momokawa14/
21	2018/12/16	9:30～16:30	ワークショップ クリスマス会	アーツ前橋 南橋町子ども育成会	南橋団地第2集会室	41人	https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/xmas2018/
22	2019/2/11	12:00～18:00	ワークショップ 題名のないワークショップ	アーツ前橋	南橋公民館	51人	https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/nankitsu-ws-untitledws/

2019年度

No.	日付	時間	内容	主催者	会場	参加者数	報告記事リンク
23	2019/7/7	14:00～17:00	ワークショップ 美術館ってなに？	アーツ前橋	アーツ前橋	5人	
24	2019/12/15	9:00～12:00	南橋団地クリスマス ワークショップ	アーツ前橋	南橋団地第2集会室	25人	https://www.artsmaebashi.jp/FoE/report/xmas2019/
25	2019/12/15	14:10～16:00	南橋団地クリスマス会	南橋町子ども 育成会	南橋団地第2集会室	75人	
26	2020/1/23	8:50～10:25	アーティスト・イン・スクール（6年1組） 絵画《足尾風景》を巡って	アーツ前橋・ 桃川小学校	桃川小学校	26人	
27	2020/1/23	10:45～12:20	アーティスト・イン・スクール（6年2組） 絵画《足尾風景》を巡って	アーツ前橋・ 桃川小学校	桃川小学校	28人	
28	2020/1/23	13:50～15:25	アーティスト・イン・スクール（6年3組） 絵画《足尾風景》を巡って	アーツ前橋・ 桃川小学校	桃川小学校	26人	
29	2020/2/5, 18, 25	13:50～15:25	アーティスト・イン・スクール（5年生） 図画工作授業補助教員	アーツ前橋・ 桃川小学校	桃川小学校	75人	
30	2020/2/26		アーティスト・イン・スクール（4年2組） 絵画《足尾風景》を巡って	アーツ前橋・ 桃川小学校	桃川小学校	26人	
31	2020/2/27		アーティスト・イン・スクール（4年3組） 絵画《足尾風景》を巡って	アーツ前橋・ 桃川小学校	桃川小学校	26人	
32	2020/2/29	13:00～16:00	ワークショップ 砂漠	アーツ前橋	南橋公民館		※新型コロナウイルス感染症拡大予防のため開催中止
33	2020/3/1	9:00～16:30	足尾ツアー下見ワークショップ	アーツ前橋	足尾町	5人	
34	2020/3/29	9:00～16:30	足尾風景バスツアー	アーツ前橋	足尾町		※新型コロナウイルス感染症拡大予防のため開催延期
35	2020/3/30	13:00～16:00	足尾バスツアー計画ワークショップ	アーツ前橋	南橋公民館	5人	

【資料】 イベントチラシと活動写真



2016年度-1



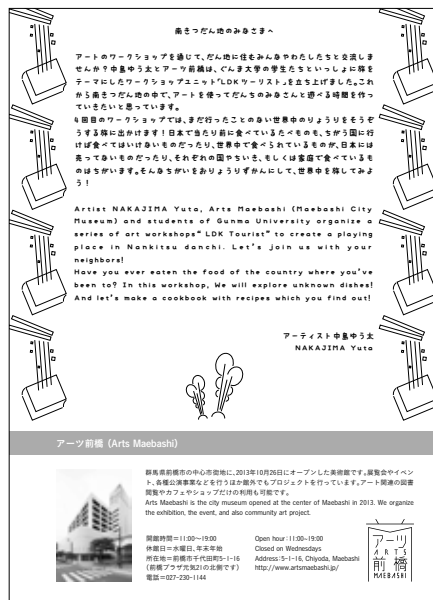
2016年度-2



2016年度-3



2016年度-4



2016年度-7

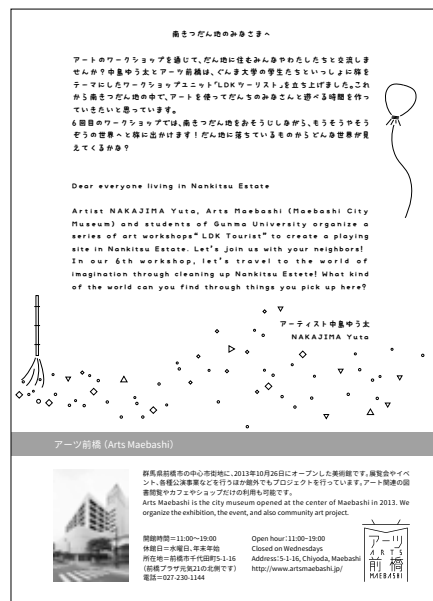


2016年度-10





2016年度-11



2017年度-14/15



2017年度-16/17





2018年度-18

高まつ町のみどころへ
 あついでまつりになりましたが、みなさんお元気ですか？
 今年は高まつ町まつりでもお祭りとして、2016年高まつ町まつりのよう
 りやまつりワークショップをやることにしました。
 ふりかえれば2016年、中島佑太とアーティスト前橋はくま大学の学生たちといっ
 しょに、くまをテーマにしたワークショップユニットをのちのLDKワークスに
 をち上げました。高まつ町まつりでも、アートあついでまつりを通じて、いっ
 つよりくまのまちの魅力を伝えていきたい。2017年からは、ワー
 クショップだけではなく、「アーティスト・イン・スクール」と題して、中島小
 学校の図工の時間に違い、図工室で子どもたちとくまのまちを楽しくつくり
 たい。何してあそびたいかしら。

アーティスト中島佑太
 Artist Yuta Nakajima

高まつ町まつり2018年7月28日(土)13:00~17:00
 高まつ町まつり2018年7月28日(土)13:00~17:00
 高まつ町まつり2018年7月28日(土)13:00~17:00

アーツ前橋 (Arts Maebashi)

群馬県前橋市の中心市街地に、2013年10月26日にオープンした美術館です。展覧会やイ
 ベント、各種公演事業などを行うほかにもプロジェクティブを行っています。アート関連の
 展覧会やワークショップだけの利用も可能です。
 Arts Maebashi is the city museum opened at the center of Maebashi in 2013. We
 organize the exhibition, the event, and also community art project.

開館時間：11:00～19:00
 休館日：水曜日、年末年始
 所在地：前橋市千代田5-1-16
 (旧橋本アサヒビル21の活用です)
 電話：027-230-1144

Open hour: 11:00-19:00
 Closed on Wednesdays
 Address: 5-1-16, Chiyoda, Maebashi
 http://www.artismaebashi.jp/
 電話：027-230-1144

アー
 ツ
 前
 橋
 ARTS
 MAEBASHI



2018年度-19

高まつ町のみどころへ
 高まつ町まつり2018年7月28日(土)13:00~17:00
 高まつ町まつり2018年7月28日(土)13:00~17:00

アーツ前橋 (Arts Maebashi)

群馬県前橋市の中心市街地に、2013年10月26日にオープンした美術館です。展覧会やイ
 ベント、各種公演事業などを行うほかにもプロジェクティブを行っています。アート関連の
 展覧会やワークショップだけの利用も可能です。
 Arts Maebashi is the city museum opened at the center of Maebashi in 2013. We
 organize the exhibition, the event, and also community art project.

開館時間：11:00～19:00
 休館日：水曜日、年末年始
 所在地：前橋市千代田5-1-16
 (旧橋本アサヒビル21の活用です)
 電話：027-230-1144

Open hour: 11:00-19:00
 Closed on Wednesdays
 Address: 5-1-16, Chiyoda, Maebashi
 http://www.artismaebashi.jp/
 電話：027-230-1144

アー
 ツ
 前
 橋
 ARTS
 MAEBASHI

高まつ町のみどころへ
 高まつ町まつり2018年7月28日(土)13:00~17:00
 高まつ町まつり2018年7月28日(土)13:00~17:00

アーツ前橋 (Arts Maebashi)

群馬県前橋市の中心市街地に、2013年10月26日にオープンした美術館です。展覧会やイ
 ベント、各種公演事業などを行うほかにもプロジェクティブを行っています。アート関連の
 展覧会やワークショップだけの利用も可能です。
 Arts Maebashi is the city museum opened at the center of Maebashi in 2013. We
 organize the exhibition, the event, and also community art project.

開館時間：11:00～19:00
 休館日：水曜日、年末年始
 所在地：前橋市千代田5-1-16
 (旧橋本アサヒビル21の活用です)
 電話：027-230-1144

Open hour: 11:00-19:00
 Closed on Wednesdays
 Address: 5-1-16, Chiyoda, Maebashi
 http://www.artismaebashi.jp/
 電話：027-230-1144

アー
 ツ
 前
 橋
 ARTS
 MAEBASHI



2018年度-22

高まつ町のみどころへ
 高まつ町まつり2018年7月28日(土)13:00~17:00
 高まつ町まつり2018年7月28日(土)13:00~17:00

アーツ前橋 (Arts Maebashi)

群馬県前橋市の中心市街地に、2013年10月26日にオープンした美術館です。展覧会やイ
 ベント、各種公演事業などを行うほかにもプロジェクティブを行っています。アート関連の
 展覧会やワークショップだけの利用も可能です。
 Arts Maebashi is the city museum opened at the center of Maebashi in 2013. We
 organize the exhibition, the event, and also community art project.

開館時間：11:00～19:00
 休館日：水曜日、年末年始
 所在地：前橋市千代田5-1-16
 (旧橋本アサヒビル21の活用です)
 電話：027-230-1144

Open hour: 11:00-19:00
 Closed on Wednesdays
 Address: 5-1-16, Chiyoda, Maebashi
 http://www.artismaebashi.jp/
 電話：027-230-1144

アー
 ツ
 前
 橋
 ARTS
 MAEBASHI

高まつ町のみどころへ
 高まつ町まつり2018年7月28日(土)13:00~17:00
 高まつ町まつり2018年7月28日(土)13:00~17:00

アーツ前橋 (Arts Maebashi)

群馬県前橋市の中心市街地に、2013年10月26日にオープンした美術館です。展覧会やイ
 ベント、各種公演事業などを行うほかにもプロジェクティブを行っています。アート関連の
 展覧会やワークショップだけの利用も可能です。
 Arts Maebashi is the city museum opened at the center of Maebashi in 2013. We
 organize the exhibition, the event, and also community art project.

開館時間：11:00～19:00
 休館日：水曜日、年末年始
 所在地：前橋市千代田5-1-16
 (旧橋本アサヒビル21の活用です)
 電話：027-230-1144

Open hour: 11:00-19:00
 Closed on Wednesdays
 Address: 5-1-16, Chiyoda, Maebashi
 http://www.artismaebashi.jp/
 電話：027-230-1144

アー
 ツ
 前
 橋
 ARTS
 MAEBASHI



[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]

アーツ前橋 研究紀要 第2号

2020年3月31日発行

編集・発行 アーツ前橋

印刷・製本 ジャーナル印刷株式会社

©Arts Maebashi Bulletin No.2 2020

Photo© 木暮伸也 P9 (上、下)、P10 (上、下)、P11 (下)、P21 (全て)、
P35、P36、P41 (右上、右下)、P46 (上、中)、
P47 (中、下)、P48 (全て)、P49 (中)、P50
滝沢達史 P11 (上)